

# 毘盧遮那仏の研究(一)

田代有樹女

## 目次

はじめに

— 毘盧遮那仏の基本的理解及び文献上と現存の尊像 —

一、中国龍門奉先寺洞本尊毘盧遮那仏坐像について

1、毘盧遮那法界人中像との関連性についての若干の考察

2、造像の歴史的背景と大像

3、毘盧遮那仏龕の様相と造像の基本思想

4、毘盧遮那仏の名称と像龕記及び僧侶の関係

結び

注記

図版

はじめに

## ―毘盧遮那仏の基本的理解及び 文献上と現存の尊像―

毘盧遮那<sup>びるしゃな</sup>仏として造像された仏像は多いが、現存するものには大像もあり、それらは実に名品である。

我国で代表される尊像は、奈良時代の東大寺金堂の本尊金銅坐像（図1）と、唐招提寺金堂の本尊脱活乾湿坐像（図2）を、また中国では唐時代に造立された、洛陽郊外龍門石窟の奉先寺洞本尊坐像（図21）が挙げられる。

このいずれも七世紀から八世紀にかけて造立されたもので、特に東大寺と奉先寺洞の毘盧遮那仏の造像者は、前者は聖武天皇、後者は高宗皇帝と、国家の権力者であり、この両国においての建造は、仏教国家の基での国家事業であった。

他に現存する我国の毘盧遮那仏の作例としては福岡観世音寺戒壇院本尊の木彫坐像（図3）などであり、唯一奈良時代の現存像は前二例にすぎない。それ以降に毘盧遮那仏として造立された像は二、三例を残すだけで、殆ど現存していないが、文献上の毘盧遮那仏を含めると、奈良時代から平安時代にかけて、数体造顕されたことが確認される。<sup>(1)</sup>これらは『華嚴經』或いは『梵網經』の宇宙観や世界観を基に造像したとされているが明らかではない。

中国では五世紀初頭以前より、いわゆる西域のコータン地方を起源として、華嚴教主毘盧遮那仏である毘盧遮那法界人中像<sup>ほっかいじんちゆう</sup>（図4、14・17・19）が造像されている。漸次クチャ、カラシャルなど東トルキスタン地方を中心に、さらに燉煌及び各地で造像され、文献上と現存の尊像共に数多い。<sup>(2)</sup>それらは『華嚴經』や『報恩經』によるものであり、像の体軀に瑞祥や仏教世界図を描出することが、

特に定義となっている。

これらは『大日経』と『金剛頂経』を基とした、両界曼荼羅の本尊としての毘盧遮那如来つまり大日如来とは、思想的解釈も尊容も異なることは明白である。ところが、東大寺と奉先寺洞の本尊は、その尊格の如何が求められるよりむしろ、律令体制下の仏教国家での象徴的存在として納得される感が強かった。また特に東大寺の大仏は、大日如来と天尊と見られて来たこともある上、同時代に唐招提寺にも毘盧遮那仏大像は造像されている。これら三体の毘盧遮那仏は、はたしてどのような理念の基で造像され、どのような尊格を有しているのであろうか。なぜ毘盧遮那と称されなければならなかったのであろうか。本研究課題としたい。

研究の第一歩として、我国及び西域地方における毘盧遮那仏像について、文献上からと現存遺作の、知り得る限りを取り上げ、巻末の注記にまとめた（例1―例46、参照）。

次いで西域の毘盧遮那法界人中像の考察を通して、中国奉先寺洞の毘盧遮那仏及び我国に現存する毘盧遮那仏は、人中像とは少なくとも、像容の上での関連性がないことを確認した。

次に本題として、仏教国家的な意味でも好例の東大寺と奉先寺洞の本尊を取り上げ仏教思想と造像の意図を考究し、さらに特にその作風に際立った唐様を示す、唐招提寺の毘盧遮那仏について述べ、三体の毘盧遮那仏の関係を捕らえてみたい。このいずれも七、八世紀の現存作例であることから、これらの造建の立場を歴史的・政治的・仏教文化的背景を踏まえて考察し、掘り下げていくことは、七、八世紀の仏教美術史を考える上でも、意義深く有益である。

本小論では、右全容の内、中国龍門奉先寺洞の本尊毘盧遮那仏坐像を中心に述べる。

尚、我国に仏教の影響を多大に与えた朝鮮半島でも、統一新羅以後には、七獅子座に坐す毘盧遮那仏がかなり明確な教理のもとで造像されているが、この尊像は本拙論の研究対象から外れるので取り挙げない。

また毘盧遮那仏のサンスクリット名は、ヴァイローチャナ(Vairocana)で、毘盧舍那、盧舍那、遮那なども音写し、光明遮照、広博嚴淨、遍一切処等と訳すが、本拙論では毘盧遮那仏を用いる。

## 一、中国龍門奉先寺洞毘盧遮那仏坐像

### 1、毘盧遮那法界人中像との関連性についての若干の考察

西域地方では五世紀初頭以前より、コータンを起源として、毘盧遮那法界人中像が造像されている。漸次東トルキスタン地方のクチャ、カラシャール、さらに燉煌及び中国各地で造像され、文献に見られるものと現存遺作を合わせると、一三三体程確認することができる<sup>(5)</sup>。恐らく未確認の尊像も相当存在するものと想像され、今後の発見が期待される。それらは『華嚴經』や『報恩經』を所依に造像されたものと思われ、像の体軀に瑞祥や仏教の宇宙觀を描き現わすことが特に定義となっている。

西域の毘盧遮那法界人中像については、既に松本榮一氏が一九三六年に「西域華嚴經美術の東漸」<sup>(6)</sup>で言及されその研究の基礎が見られる。それを踏まえて一九五〇年に水野清一氏が「いわゆる華嚴經主毘盧遮那仏の立像について」<sup>(7)</sup>に於てまた、一九五九年には吉村令氏が「盧舍那法界人中像の研究」<sup>(8)</sup>に於て、さらに一九八〇年には伊藤史朗氏が「盧舍那仏立像」<sup>(9)</sup>に於て論述され、考察が重ねられ研究成果が認められる。この人中像の名称をまとめて見ると盧舍那・法界・人中といった語の複合や組み合わせで、次の七通り程の例となる。

盧遮那法界人中像  
盧舍那像  
法界像  
人中像  
人中盧舍那像  
法界盧舍那像  
法界人中像

体軀に何らかの象徴的な形象か、仏教世界圖が描出されているこれらの毘盧遮那仏について、大村西崖氏は『支那美術史 彫塑篇』<sup>(10)</sup>で、「單なる盧遮那仏と異なるか否か明らかでない」と述べているが、吉村令氏は「人中」を形態形容詞と解釈し、「單なる盧遮那仏とは異なる形態の像」と主張している。筆者も後者の見解である。

では一体「單なる盧遮那仏」とは何を意味するのであろうか。これこそ本論の主題に通じる重要な問題点である。

毘盧遮那法界人中像についての詳細は別論に譲るが、結論的には中国奉先寺洞及び我国東大寺の毘盧遮那仏は、人中像とは少なくとも、図像的には関連性のないことが確認できる。

然ば、奉先寺洞の本尊毘盧遮那仏坐像は、如何なる仏教思想の基に造像されたのであろうか。現存する仏龕と、碑文を頼りに、歴史的、仏教美術的な観点から考究して行きたい。

まず造像の歴史的な背景を、造像者及び大像である意義を含め考察したい。

### 2、造像の歴史的背景と大像

龍門石窟は、河南省河南府洛陽の南郊外に位置し、伊水をはさんで兩岸の香山、龍門山の石壁に掘鑿された、大小の数千にわたる窟龕を有する。龍門は古称を闕塞または伊闕<sup>(11)</sup>と言ひ、龍門石窟は龍門

龕、伊闕龕とも称される。

伊闕での石窟寺院の着手は、北魏の孝文帝が洛陽に遷都する前の太和七（四八三）年といわれるが、西晋の初年には既に伊闕の山寺で、道教の徒が登仙していたから、伊闕山寺の創建は遅くとも三世紀中以前と考えられる。

仏教寺院の造営は、孝文帝が洛陽に遷都した太和一七（四九三）年以降のことであり、古陽洞、賓陽洞の開鑿に始まり、時代は隋、唐におよび、則天武后の頃まで続いている。龍門奉先寺洞は左岸西山の最大規模の像龕で、高宗皇帝・則天武后の時に落成をした。

現存する龍門奉先寺洞は壁龕番号第一二八〇で、第一九窟にあたり、大仏洞、奉先寺、奉仙寺、九間房、九龍洞、第一九窟奉先寺盧舍那大仏なども称されるが、主尊毘盧遮那仏台座の北側に左行で刻された〈河洛上都龍門山之陽 大盧舍那像龕記〉（以下〈像龕記〉と略記）には、大盧舍那像龕と記されている。

また〈像龕記〉には「調露元年己卯八月十五日、奉勅於大像南。置大奉先寺。」と刻され、調露元（六七九）年に高宗の勅命により大仏の南に大奉先寺を建立したことを伝えている。奉先寺は木造建築であつた。従つて本来は像龕と奉先寺は別のものと考えなくてはならない。

木造奉先寺は開元一〇（七二二）年春に、伊水の洪水により倒壊し、同年一二月五日には、勅令により龍華寺と合併している<sup>(14)</sup>。以後隆盛を見、様々な人物の往来があつたが、元末以降は史書、石刻資料からその名を消した。現在魏灣村以北の西側に確認されている奉先寺遺址は、東面し洛伊公路によつて二分されている。

これらの経緯を得た現在、大盧舍那像龕は奉先寺と混同され、名称も曖昧になっているが、本拙論では奉先寺洞を用いる。

さて奉先寺洞大盧舍那像龕の造立発願者は唐の高宗で、咸亨三（六七二）年四月一日に則天武后が脂粉錢二万貫を助成し、上元二（六七五）年一二月三〇日に完成していることは、〈像龕記〉に「大唐高宗天皇大帝之所建也。…咸亨三年壬申之歲四月一日、皇后武氏助脂

粉錢二万貫。奉…至上元二年乙亥十二月卅日畢功。…」と記されていることからうかがうことができる。

ではいつから開鑿されたのであろうか。〈像龕記〉に拠るとして、従来この像龕の造建開始を、咸亨三年とする考え方が強かった。しかし〈像龕記〉には、造営開始については記されていないばかりか、咸亨三年は則天武后が脂粉錢を助成した年である。この年を造営開始と解釈すれば、施工期間は僅三年九カ月しか費やしていないことになる上、〈像龕記〉冒頭の、高宗の発願文の正確さを欠くことになる。高宗の発願の開始を推測するのは困難であらうが、即位の年、貞觀二三（六四九）年を考慮すれば、上限はこの時より溯らないと思われるが、開鑿時期と一致するものであろうか。この像龕造営開始の疑問点については、奉先寺洞を、北魏皇室が景明年間（五〇〇―五〇三）に開鑿をすすめ、未完成に終わった石窟を転用したものとする見解が既にある<sup>(15)</sup>。

この件についてはさらに研究を進める必要はあるが、施工期間が僅三年九カ月というのは、あまりにも短いと思わざるを得ない。ただし開鑿されただけの未完成の龕にはまだ仏像はなかったようである。現在の大仏龕は高さ約三〇メートルで、間口と奥行共約三〇メートルの、正方形に近い平面を構成する空間に、西面正壁と、北壁と南壁が垂直に切立っている。この空間はいつ整備され、いつ仏像が彫り始められたのかについては、今後の研究を待たなければならない。

仏龕内は本尊毘盧遮那仏坐像を正面西壁中央に安置し、左右対象に各々、羅漢、菩薩立像を、また北壁と南壁にはそれぞれ奥から、天王、力士立像を配している。主だった諸尊は計九体であるから俗に九間房、九龍洞とも名付けられ、本来は大仏龕前方の崖に「九間房」と刻されていた<sup>(16)</sup>。また左右に供養者立像が九尊と一群になるように、彫り出され、他に四八体の等身仏立像などが彫り込まれている。

大仏龕には大屋根はなく、露坐を思わせるが、それぞれの壁面には、尊像の並びと厚みに応じて、幅と奥行きを持った弧を描く窪み



のせり出しを形成した仏龕が掘られている。壁面には数箇所にほぞ穴が確認されることから、かつてはそこに桁や梁を通して、かけだし状の屋根を取り付けていたと想像される。

正面のかけだしは仏龕せりだし下あたりから出て、張り出しの幅は約一〇メートル、四架の桁と六個の梁が通り、その幅約三〇メートルであるから、相当大規模な建物が建っていたことになる。南北両壁には、もう少し狭い屋根がかけられていたようである。

これを木造建築物とみて、水野清一・長廣俊雄両氏は、一九四一年発刊の『河南洛陽 龍門石窟の研究』の中で、この建物こそ「像龕記」に記されている大像の南に置かれた大奉先寺であるとし、実は東に建立されたのだという見解を論述された。<sup>17)</sup>今では研究も進み、龍門西山の南端約二〇〇メートル西にある魏灣村の北に、大型木造建築の奉先寺のあったことが、遺址の調査により確認されている。<sup>18)</sup>

仏龕に建築物を取り付けたのはいつのことかは判明しないが、正面には五間の正殿、両側にはそれぞれ三間の配殿、下層台地の南、北壁には三間の僧坊が立てられたが、宋代以降に建築物が尊像破壊の原因になるとして、取り壊され現在に至っている。

尚龍門石窟研究所では、大像龕の主尊はじめ、左羅漢、南壁の天王、力士立像などの破損が特に激しいのは、岩石の構造上の問題で、人工的な破壊ではないとしている。<sup>19)</sup>

さて中央本尊坐像の像高は約一三メートル。台座共で一七・一四メートルである。ここに毘盧遮那仏の巨大像が造立されたわけである。今までにも大像の顕造は西域をはじめ中国では各所で盛んに行われ多数現存するが、インドでは行われていない。

インド周辺で最古と思われるのは、ダレルに造立された二〇メートル以上もあったと言われる木造弥勒大仏で、五世紀初頭には存在していた。<sup>20)</sup>ダレルは現在、パキスタンとインドの国境地域の、パミールやカラコルムの山々が入組んだ辺境の峡谷に位置するが、当時はガンダーラからカラコルム西脈を越えてカクラマカンのオアシス

へ出る、重要な交通路の主要地であった。インドと中央アジアとの接点でもある。ダレル東南ラダックの、レーへ向かう途中のムルベックには、摩崖に高浮雕りされた像高約一〇メートルの四臂の弥勒菩薩立像が現存する。八世紀から九世紀の作とみられている。ここはカシミール文化圏とチベットのラダック文化圏の接点で、主要街道沿いである。ラダックへも仏教美術は伝播するが、一〇世紀以降チベット仏教が隆盛する。

またインド世界と中央アジア世界とを結ぶ、もう一つの幹線道路として、ガンダーラからのヒンドウークシュ山脈越えのルートがあった。その主要中間地点のバミアンでも大像が顕像されている。こちらのルートの活発化は、先のカラコルム西脈・パミール越えルートより遅く、六世紀中以降であった。<sup>21)</sup>バミアンには約一・五キロメートルにわたって続く断崖に、約七五〇の石窟が掘られ、東西のそれぞれに摩崖仏の大像が現存する。東大仏は三八メートルの釈迦立像で、西大仏は五五メートルの弥勒立像である。

天山南路の主要都市クチャのキジル石窟やシムシム石窟にも、一〇メートル前後の塑造大像がいくつか存在したことは、現存する仏龕からうかがい知ることができる。

これらの地はシルクロード上の主要地であり、通商もさかんで豊であったが、それ故に民族や国家形成では厳しい状況が続き、王権の安定は誰もが願っていたに違いない。

王権と絡んで弥勒仏の大像が造像されたのは、転輪聖王との結び付きからであろう。既に鳩摩羅什(クチャ出身 三四四〜四一三年、又は三五〇〜四〇九年)訳『弥勒大成仏経』(四〇二年訳出)、『弥勒下生成仏経』(四〇二〜四一二年訳出)などで弥勒信仰が説かれているが、そこでは弥勒は単に未来の仏陀というにとどまらず、転輪聖王と言う理想的な王権と結び付いているのである。弥勒を大像にしないでならない理由は、弥勒の未来世出現に関わる時間的、寿命的な周期を、仏陀の身長という視覚的なものに置き換えた弥勒經典の思想を表現したからと考えられる。

仏陀跋陀羅（北インド出身 三五九〜四二九年）訳『観仏三昧海

經』（二六八〜四二二年訳出）では十六丈、訳者不詳『弥勒来時經』

（東晋代三一七〜四二〇年）でも十六丈、鳩摩羅什訳『弥勒大成仏

經』では「身紫金色具三十二大丈夫相。坐寶蓮華。……不可思

議毛孔光明。照耀無量無有障礙。……身長釋迦牟尼佛八十肘。三

十二丈。脇廣二十五肘。十丈。面長十二肘半。五丈。……以自莊嚴如

鑄金像一一好中流。出光明照千由旬。肉眼清徹青白分明。常光繞

身面百由旬。日月星宿眞珠摩尼。七寶行樹皆悉明耀現於佛光。其餘

衆光不復爲用。佛身高顯如黃金山。……と述べ、弥勒は紫金色

で三三相を備え、宝蓮華に座す。毛孔に光明があり照耀無量で障礙

なく、身は釈迦牟尼仏より長くて三三丈としている。また同訳『弥

勒下生成仏經』では「……身紫金色三十二相。……身力無量不可思議。

光明照耀無所障礙。……身長千尺胸廣三十丈。面長十二丈四尺。身

體具足端正無比。成就相好如鑄金像。肉眼清淨見十由旬。常

光四照面百由旬。日月火珠光不復現但有佛光」とあり千尺とな

っている。

弥勒信仰と千との関係が深いことは、弥勒には千人の弟子がいる

とか、転輪聖王には千人の子があるとされたり、また千仏洞の中尊

であることから理解される。

經典の内容からすると弥勒仏は、身体は紫金色で、黄金山のように

大きく仏光を放っており、その美しさはまるで鑄金像のようであ

る。光は相当遠くまで、しかも全ての物を照らすばかりではなく、

遠くまで見通すいわば千里眼を持っている。そして三三相を備え宝

蓮華に座していると解釈することができる。この思想はこれらの經

典の訳出年代から考察すると遅くとも五世紀初頭には確立されてい

たことになる。

調度その頃コータン地方を起源として、人中像が造像され始めて

いることは興味深い。

弥勒仏を造像する場合、光り輝く大きな仏像として表現する必要

があり、大きい程、現世の幸福が約束され、国家の反映に繋がると、

当然理解されよう。

弥勒大仏を寺院の本尊とすることは、先祖の供養と共に、未来世

界と国家繁栄を願うには打って付けであり、仏教を国家と結び付け

る要因でもあった。

この金色の仏像のイメージは、無数の光を放つとされる釈迦牟尼

や、光明遮照と呼称される毘盧遮那仏と重なる。このことを記憶に

とどめて論を先に進めたい。

中国国内での最初の大仏造像は、雲岡の曇曜五窟であることは著

名である。雲岡石窟は北魏の都であった平城の西南にあり、武州川

に沿う断崖に約五〇の石窟がある。その中に五体の大像が存在する。

大仏の造営が始まったのは龍門に先立つ、和平年間（四六〇〜四

六五年）の初めで、沙門統の曇曜が、石窟五カ所を開き、それぞれ

に仏像を一つずつ彫り出すことにしたいと、時の皇帝文成帝に石窟

の造営を申し出て、北魏の歴代五人の皇帝を祀るために造顕した。

元来遊牧民であった鮮卑民族の北魏では、絶対的専制君主下での

仏教擁護と布教のため、仏教を廃毀した太武帝（在位四二三〜四五

二年）の後に、<sup>とうこんだよろいしきょう</sup>「当今如来思想」つまり、皇帝はこの世に現れた如来

である、と言う思想を打ち出した。大像の造立はこのような考え方

とも深く関わっていたと思われる。時には太武帝や北周武帝（在位

五六〇〜五七八年）、また後の唐武宗（在位八四〇〜八四六年）のご

とく、仏教弾圧の政策をとった帝王もいたが、歴代帝王の周辺では

大仏造像の風潮があり、その造像発願者は王自らの場合も、僧侶の

場合もあった。造像功德の意識も当然あった。

曇曜五窟は、第一六窟から第二〇窟までにあたり、その五窟に五

体の大仏彫像が並んでいる。この五体の大仏はそれぞれ尊格も尊格

も異なり、北魏のそれまでの五人の皇帝、つまり道武帝（在位三八

六〜四〇九年）、明元帝（四〇九〜四三三年）、太武帝（四二三〜四

五二年）、南安王（四五二年）、文成帝（四五二〜四六五年）の、そ

それぞれの仏陀観を重ね合せて造像されたとするが、どの像が誰に当たったのかは判明していない。また尊格のなお不明な像もあるが、第一六窟から順次見て行くと次のごとくである。

第一六窟 一四メートルの立像。着衣は中国式で他と異なるが、尊格は明らかではない。

第一七窟 一六・三メートルの弥勒菩薩交脚坐像。兜率天上の弥勒菩薩と思われる。

第一八窟 一五・八メートルの立像。左手で衣端を握る。衣文に多くの小化仏が浮彫りされている。このことからこの像は、盧遮那仏か釈迦仏と考えられているが、近年では後者とする考えかたが強い。しかし大像で毛孔から光明を放つのは毘盧遮那仏でも、弥勒仏でもよいわけである。

第一九窟 一六・五メートルの坐像。本尊結跏趺坐像の両側に脇洞があり、各々倚坐像が彫られている、これを三尊像とみて、弥勒の龍華三会の説法を表現したものとするれば、この像は下生の弥勒如来像である。五体の大仏のうちで、最大であることも意味深い。

第二〇窟 一三・五メートルの坐像。尊格は今だ判明されず、今後の研究が期待される。

雲岡にはこの他にも、勇壮な仏像や、目を見張るような、千仏洞が現存するが、曇曜五窟の大像は、弥勒仏と転輪聖王の関係を現実での理想世界に見立てた、皇帝崇拜と大仏造像という構図を具現したもので、やがて現実世界を仏教世界観に重ね合わせ、仏教国家を確立していく契機ともなった。

また雲岡での石山を開鑿しての大像の造頭は、拓跋部族が北魏を建てる前には石室を祖宗の廟とする習慣があったことと通ずるもの

と思われる。伊闕の石山は、道教の徒が登仙していた靈山でもあった。これらは決して特別な例外のことではなく、仏教の尊像を、石壁や石窟に彫り出すことは、もともと先住民族の聖地であった靈山に、異教の仏教尊を顕現することで、仏教と民族思想の融合あるいは、習合を顕著に示すものに他ならない。仏教と民族思想の習合については、井上正氏の研究に詳しい。この問題は仏教美術を考察する上での重要な焦点でもある。

唐代において大像の造立は盛んになり、燉煌から河西回廊沿いに、西安そして洛陽に至る主要交通路に点在する石窟中に現存している。現在知り得る大像を燉煌莫高窟から順に東へ見ていくと次のようである。

燉煌莫高窟 第九六窟の北大仏。三三メートルの倚坐像。武后期の延載二(六九五)年に禅師靈隱が居士陰相らと共に造った弥勒仏。

第一三〇窟の南大仏。二六メートルの倚坐像。開元年間(七一三―七四一年)に、僧処諲が郷人馬思忠らと造った弥勒仏。

天梯山石窟 第一三窟の二六メートルの倚坐像。左右に菩薩、羅漢、天王を配した七尊形式。

炳靈寺石窟 第一七一窟の二七メートルの倚坐像。貞元一九(八〇三)年の建立。

麦積山石窟 第一三窟の東崖大仏。一五メートルの倚坐像。左右に脇侍菩薩をとる弥勒仏。隋代の作。

第九八窟の西崖大仏。一四メートルの立像。両脇侍菩薩立像をとる。北魏の作。

須弥山石窟 二〇メートルの倚坐像。晩唐の作と見られる弥勒仏。

大仏寺石窟 二五メートルの坐像。唐代の作と見られる。

樂山凌雲寺 七一メートルの倚坐像。唐玄宗の開元初(七二三)年に海通禪師の発願により着手され、貞元一九(八

〇三二)年に、節度使韋皋<sup>いこう</sup>の援助によって完成した弥勒<sup>いれ</sup>仏。

龍門奉先寺 第一九窟の一七メートルの坐像。唐代上元二(六七五)年に完成した毘盧舍那<sup>びろくせな</sup>仏。左右に羅漢、菩薩、天王、力士を配した九尊形式。

これらの多くが並脚坐像の下生の弥勒仏である。特に北魏では、交脚の菩薩像は兜率天上の上生の弥勒仏であるとし、唐代には三体の倚坐像で下生の弥勒三會説法を表現することが多くなる。弥勒仏が交脚や並脚の坐勢をとるのは、転輪聖王との関わりから王者皇帝の姿勢を模したものと言われるが、穰佉<sup>じやんか</sup>転輪聖王が出世してはじめて、弥勒の下生が成立するわけであるから、転輪聖王と弥勒仏とは同じものであつてはならないはずである。皇帝の姿を弥勒仏に重ね合わせるというのは、混同を来たしている。現実には皇帝崇拝があり、実際の王者の坐勢が倚坐勢や交脚坐勢であるならば、倚坐大像こそ転輪聖王、あるいは時の皇帝であつてもよいわけである。

実は經典の上からも、転輪聖王と弥勒仏を同一視して説くものがある。

閼那崛多<sup>じやなくた</sup>(ガンダーラ出身 五三三―六〇〇年)訳『仏本行集經』(五八七―五九一年、又は五九二年訳出)卷一「発心供養品」一には「時彌勒菩薩。身作轉輪聖王。名毘盧遮那……毘盧遮那轉輪聖王」と記述され、弥勒菩薩と転輪聖王は同じ尊格で、尊名を毘盧遮那としている。さらに毘盧遮那轉輪聖王と呼んでいる。

皇帝崇拝が転輪聖王と重なり、弥勒仏の大像の造頭を通して、毘盧遮那仏造像にと展開して行く可能性は充分あつた。

中国においての並脚像として最も知られるのは、優填王<sup>うてんおう</sup>像である。優填王像は殆ど唐代に造られたようで、像高は一メートル前後と大像ではない。どのような大きさをもつて大像とするのかは、極めて観念的なもので、規定があるわけではないが、大きさの違いが、弥勒像との区別となるのであろうか。

こうして大仏の造立が各地でなされたが、皇帝発願の毘盧遮那仏は高宗の顕像のみで、弘道元(六八三)年に高宗が崩じた後も、続いて則天武后は弥勒仏とからんだ大雲寺を各州に建立する計画を企てたり、洛陽城内の天堂に乾濕造弥勒仏大仏を造像した。また洛陽北の白司馬坂に銅造大仏の造立を企てたりもした。則天武后は義淨(六三五―七一三年)にも『弥勒下生成仏經』の訳出をさせている。經典に説かれる、八万歳という人の寿命が魅力的であつたのであろうか。六九〇年には武周革命まで起こしている。

西域及び中国における巨大像は、殆ど弥勒像ないしは釈迦像といつても過言ではないが、その中にも毘盧遮那大像は造像された(例14(例19))。

奉先寺洞の毘盧遮那仏の体軀には、瑞祥文や仏教世界海が現されていない。従つてこの像は毘盧遮那法界人中像の系列にの属しているのではないことは明らかである。

毘盧舍那法界人中像は、コータン地方を起源に、パミール高原の東、天山山脈の南、崑崙山脈の北、燉煌の西に位置する、いわゆるタリム盆地を中心としたタクラマカン砂漠に点在していた、シルクロードの主要都市付近の遺跡で多数発見されている。コータンから北上し、キジールから燉煌までの天山南道沿いの、エンギ、カラシヤール、トルファンそして燉煌などから発見されている。また近年では中国国内で、金銅仏等も確認されているが、そのいずれも大像ではない。毘盧遮那法界人中像の体軀に、仏教世界海を描出するべく定義付けは確認できても、大像としなくてはならない理由は經典からも見出だせない。また人中像ではなくても毘盧遮那仏の表現にあつても、弥勒仏のように大像とすべく具体的な思想は今だみつからない。

今までに述べてきたように中国では皇帝と結びついた大像の造像や、石窟寺院の造営がなされて来た。唐代においての龍門も、第二代皇帝太宗の第四子魏王泰が潜溪寺洞を、太宗の妃で第十子紀王慎

の母、紀国太妃韋氏が敬善寺洞を、そして魏王泰の同母弟第三代皇帝高宗が奉先寺洞を造営している。奉先寺洞は勅願により開鑿された。奉先寺洞の大像毘盧遮那仏は、しかし従来の弥勒仏そのものでも、人中像の形式でもない。いったいどのような思想の基に造像されたのであろうか。現存する仏龕の具体的な様相と、造像当初に関わった僧侶を考慮に入れ、毘盧遮那仏造立の基本思想を解いてみたい。

### 3、毘盧遮那仏龕の様相と造像の基本思想

奉先寺洞大仏龕は本尊毘盧遮那仏坐像を中心に、左右に各々、羅漢、菩薩そして天王、力士の立像を脇侍とする九尊像形式である。本尊を中心とする左右対象の尊像群の形式は、主尊とその両脇侍菩薩の、僅か三尊像形式を原形とする釈迦説法の場面から発展していることは言うまでもない。その形式は五尊、七尊、九尊等があり、龍門石窟でもそれらの形式をほぼ基本としている<sup>(28)</sup>。

〈像龕記〉によると「…佛身通光座高八十五尺、二菩薩七十尺、迦葉阿難金剛神王、各高五十尺。…」とあり、諸尊の大きさと共に尊名を説明しているが、本尊の左右の羅漢を、迦葉と阿難とし、力士と天王を金剛神王であるとしているのみで、二菩薩については尊名を挙げず、その他の尊像には触れていない。本尊の脇侍として、左側に迦葉、右側に阿難が配されているが、迦葉と阿難は本来、釈迦弟子である。あるいは釈迦弟子の中でも、迦葉は弥勒仏と何らかの形で繋がりとあると言うこともできようが、禪宗でも迦葉と阿難は釈迦の脇侍となる場合もあるように、この二弟子は釈迦に従属させるのが一般的である。

本尊が毘盧遮那仏であるならば、迦葉と阿難は脇侍としてその根拠が乏しい。金剛と神王の尊格は、護法神であることが明らかであるので特に問題はないが、〈像龕記〉には二菩薩の尊名は明かされて

いない。

これら九尊の他に主な像として、供養者の立像が左右に各々配されて一尊をとっているが、さらに仏龕の壁面にはその空間を埋めるように、等身の仏立像及び、小龕が掘り込まれている。この大像龕はどのような構成になっているのであろう。まず尊像の様相から見ていきたい。

現在大像龕はかなり整えられ、本尊と脇侍の台座や、基壇もその全容が明らかとなったが、造建以来の幾久しい年月の間に招いた自然破壊のために残念ながら欠損したものは、本尊の両手と膝、左脇侍の迦葉像の頭部と口元を残す顔面と両腕、供養者像の顔面と胸部と両腕、右脇侍の阿難像の両腕、菩薩像の手元、供養者像の胸部と両腕、天王と力士像は原形をとどめるに過ぎず、顔面などである。

幸い、本尊と阿難、両菩薩、左側天王と力士像は、比較的保存状態は良く、容姿ばかりではなく顔はその表情までも良く見て取れる。現存の状態から、龕全体の様相を覗いてみたい。

高浮雕の本尊は八角形束腰の台座に坐すが、恐らく結跏趺坐であろう。八角形台座の最下部には覆蓮華を巡らせ、束腰部上部には四重の持送りを出しその上に三層の仰蓮華が彫刻されていたと見られるが、その蓮座が円座の形状であったかどうかは、坐勢、衣の裾の形状と共に今は知る由もない。唯僅かな痕跡から、仰蓮華の一弁毎に化仏坐像の彫られているのが確認される。腰部には神将像とも思われる天部像が数体彫られている。

頭髪は螺旋ではなく波状文で表現され、面相は端整で、福よかな丸みを持っている、切れ長の目は刀が深く、上瞼をやや重たくして下を見下ろす半眼となっている。孤を描く肩、整った鼻と引き締まった口元、両耳は大きく垂れ、首には三道を現している。大衣は通肩式で右の肩から左の肩先に衣端をかけ、衣文は胸腹にかけてゆったりした同心円文を刻んでいる。

光背は頭光と挙身光の二重光背で、頭光は頭部と同心円の二重の

円光を囲む宝珠形からなり、その中程までを下から包む拳身光は舟形を思わせる飛天光である。宝珠形最高部は湾曲する仏龕天井のせり出しに沿ってカーブしている。頭光の中心部には蓮弁が連なり、その外縁は二脇侍を伴った三尊形式の七仏が配される唐草文帯である。その周囲を宝珠形が囲み、雲形の揺らいだ火焰が平たい面で彫られている。火焰中心には小龕が施され、三尊像の小仏が彫り込まれている。拳身光は本尊の台座より幅広く、宝珠光上部のやや下まで覆っている。内区は宝珠光での火焰に類似した大まかな火焰が連なり、細い花文帯を隔てて外区の縁光部には天衣を翻し歌舞、演奏する飛天が彫り出されている。飛天の揺らいだ長い天衣と霊芝雲や花紋が、調和良く配置され、この像を莊嚴供養している。

本尊の両側は迦葉と阿難であるが、この二像も実に秀作である。迦葉の顔面は上部が殆ど破壊しているが、僅かに残された右耳の一部と顎、口元からでも、年齢を重ねた迦葉の人格までも読み取れるような写実性をそなえている。釈迦の信頼が最も厚く、頭蛇第一の長老と称せられた十代弟子の一人である。右側の阿難は釈迦の従兄弟に当たり多聞第一として知られる。凛々しくも慈愛深い、整った面立ちは本尊と共に比類ないであろう。若い僧であることも一見して判る。首に三道を刻み交領衿をつけている。恐らく迦葉の着衣も同じように表現されていたのであろう。

共に八角形の束腰の蓮華座に立っている。束腰部には宝珠形の格峽間が、また束腰部より上には仰蓮と覆蓮からなる円形の蓮座になっている。光背は迦葉と阿難とも、二重円光の頭光が壁面に線刻されている。

二弟子の両横の二菩薩は共に穏やかで端整な面持ちで、薄い条帛に裳、天衣をまとい、緻密な唐草文の宝冠に耳當、胸飾、瓔珞、腕釧等で装飾しており、やはり二弟子と同形の八角形束腰の蓮華座に立っている。左菩薩は右手を胸に、二指を念じ、左手は垂らしてい

る。右菩薩はその対象形であろうが、両手首は欠損している。光背は宝珠形頭光で、中心の円形の外にせまい蓮弁帯があり、その周囲に霊芝雲の文様帯、外周縁部分に本尊光背に見た火焰帯が施されている。この二菩薩を、中国の龍門石窟研究所では文殊と普賢としている。

以上の五尊で西側正壁の仏龕は構成されているが、二菩薩の位置は丁度北壁と南壁の角に当たる。従って宝珠形光背は、両壁にそってやや湾曲し、それが三壁を繋ぎ、仏龕全体の調和を整える役割を果たしている。

北壁と南壁はそれぞれ護法尊の天王像と力士像を配する龕である。北壁には西に天王像で、大きな顔は肩と目を吊り上げ、額と眉間に皺を寄せた忿怒の形相を取っているが、その割りに口元が穏やかである。右手で三重の宝塔を捧げ、左手は腰に当て、展座にも似た姿勢で踏ん張って邪鬼を両足で踏み付けている。冠を戴き、華美な装飾の甲冑を付け、小さな球形の耳當を付けている。足下の邪鬼は猪首鼓腹でインドのクベラを彷彿させる。

左の力士像は顔を東に向け目を剥き、眉間に皺を寄せている。鼻翼のはった鼻と歯並びを見せた口は力士の勇猛感を示しているが、太い首が一層それを引き立てている。左手は胸元で掌を向け、右手を腰に当て、上半身をひき左足を軸に両足で踏張っている。小さな髻に冠を戴き、上半身は裸形であるが下裳と天衣を纏っている。整った耳に耳當を付け、胸飾、瓔珞、臂釧、腕釧、足釧で飾っている。台座については、岩座であろうと思われるが確認できない。いずれの光背も、二重円光の頭光である。

天王像の右側に、雙角髻の童子形の供養者立像が現されている。唐衣を纏い、杏をはいて仰蓮華座上に立っている。

南壁の二天像も北壁とほぼ同様の対象形と思われるが、天王の持物は判明できない。また力士像においては、手足の動きや形象の違いがやや認められるにすぎないが、仏龕全体の仕上がりや雰囲気は

読み取ることができよう。

主だった九尊と供養者像二尊と、龕全体を荘厳するのは、仏像の光背である。さらに壁面を埋めるように、小龕が彫られていて、そこには一尊から、四・五尊の等身大の仏立像が幾組かに分けて現されている。円満な顔立ち、整った身体には本尊と同じ通肩の衣か、双領下垂式の大衣をまとい、同じような七仏及び火焰の施されている、宝珠形の頭光を負っている。台座は両脇侍と同形であるが、格峽間内部には鎧甲をつけた天王が彫られている。この仏像は仏龕の壁面の間に、合わせて四八体彫り込まれていたらしい。尚よく見ると、阿難像の右には、仏菩薩と二羅漢の五尊像形式の小龕がある。その龕の最下部には仏塔を中心とした供養の場面が現されている。これらの小龕は大像龕造像の当初から計画的に組み込まれたものではない。

〈像龕記〉によれば、この仏龕の構成・設計や作者は、高宗の勅令により、工事の検校は長安實際寺の僧善道禪師と法海寺主惠暕法師、大使には司農寺卿韋機、その副使には東面監上樊元則がえられ、支料匠として李君贊、成仁威、姚師積等があてられた。

善道とはおそらく生年六一三年、没年六八一年の浄土教の大成者として名高い善導のことであろう。善導の伝記については今だに二人説が錯綜するなど不明な点も残されているが、今までの研究により、一応結論付けが為されたことになろう。善導は初め法華、維摩を学んだが、後貞観年間(六二七―六四九年)に玄中寺で道綽に会い、曇鸞・道綽と相伝する浄土教を受け念仏行にめざめ、善導流の浄土教を大成した。善導が高宗の命を受けた頃は、浄土変相図を描くなど、浄土願生の心を鼓吹する立場にあった。

惠暕については甚だ明確さを欠くが、龍門第一一洞の供養者である惠簡とみられている。

大使の韋機は当時の設計者としては、非常に名高い<sup>(31)</sup>。太宗、高宗の頃から則天武后の永淳(六八二―六八三年)頃までの人で、唐王

朝の上陽宮の設計、洛河中橋の移転等で、太宗の称賛を得ている。

また支料匠李君贊は工匠である。工匠は社会的地位が低いとされることから歴史書に記述は殆どないが、李君贊についてはしばしば造像記等に名が見られる<sup>(32)</sup>。それによると大仏龕造宮終了後は紫桂宮の建造にも携わっている。このことから、李君贊はたぐいまれな工匠であり、管理者であったことが理解されよう。

奉先寺洞の大仏龕はこうして、高僧善導の指揮、企画のもとで、当時最高の設計者韋機の設計により、最高の技術を持った彫刻家達により造営された。完成した上元二(六七五)年の時点で内部の尊像は、本尊と二菩薩、迦葉、阿難、金剛、神王のみであり、奉先寺の建立はさらにその四年後になる。

ここで先の仏龕内部の壁面に彫り込まれている、等身仏立像四八体について見ていくと、これらの像に相当する造像記は、北壁東側の摩崖に刻された「大唐内侍省功德之碑」の「内供養高力士等一百六人造無量壽像記」で、中に「敬造西方無量壽佛一鋪。一十九事。」とある。紀年は開元一八(七三〇)年或いは、一三(七二五)年などの異説があるが、いずれにせよ大像龕完成後五〇年程してからの造像である。ここに見られる高力士とは、玄宗朝におけるもつとも有力な宦官である<sup>(34)</sup>。龍門における等身像の造像の流行は高宗前期から起り、武則天と玄宗の時に盛んになり、大量に彫像された。奉先寺洞に彫像された時には、すでに、高宗も、善導禪師もいなかった。

このように、奉先寺洞仏龕内部は、建立当初から現在に見る様相ではなかった。

善導が浄土教の大師としてその思想を唱えるのであるならば主尊を阿弥陀仏としなくてはならなかったであろう。当時は依然として皇帝崇拝と結び付いた弥勒仏の造像が盛んであった。高宗後の則天武后に至っては尚一層、弥勒信仰にこだわり取り憑かれていった。

高宗は竜朔二（六六二）年に、沙門の敬礼問題に対して君親を拝すべしと詔した。その態度から、当今如来の思想の基で大仏造像の発願がされたのであろう。

《像龕記》中には毘盧遮那仏の名は見えていない。唯一碑文の題名だけが「河洛上都龍門山之陽 大盧舍那像龕記」と盧舍那を挙げている。高宗の勅願で、しかも自らの希望で主尊を毘盧遮那仏としたのであろうか。あるいは称したのであろうか。毘盧遮那大仏の造像提案者は誰であったのか。

像龕の造形的な観点からでは、本尊毘盧遮那の必然性はつかめない。定説では手掛かりとして今まで、蓮華座の一弁毎に彫像された化仏を取り挙げ、『梵網經』の蓮華藏世界海を表現したものを見て本尊毘盧遮那と断定してきたが、はたして仏身觀はどのように解釈されているのであろう。

ここで先の『仏本行集經』の「時彌勒菩薩。身作轉輪聖王。名毘盧遮那。……毘盧遮那轉輪聖王……」を再確認して見ると、彌勒仏と轉輪聖王と毘盧舍那仏の三仏は同一であるから、彌勒仏が大像であるなら大きさにこだわれば、三仏共に大きくても当然である。しかしこれらのいずれもが必ず大像で作られているとは限らないことは明白である。それは図像のみでは尊格が判断できない場合もあるという重要な意味を示している。

但し三仏を結ぶ可能性は社会的にも、思想的にも充分にあった。そこには非常に現実的な我身轉輪聖王と、光明即弥勒仏の關係が成立し、そこから毘盧遮那仏へと広がる仏身觀があつたからである。奉先寺洞窟遮那仏をこの流れに沿う大仏と見ることもできよう。

今一つそれとは別に、太陽即釈迦牟尼と、その法身としての毘盧舍那とを結ぶ仏陀觀も根強く存在していることは周知の通りである。

毘盧遮那仏の起源を求める研究では、宮坂有勝氏の論文「アスラからビルシャナ仏へ」<sup>(35)</sup>、頼富本宏氏の著書『密教仏の研究』<sup>(36)</sup>などの著

述に詳しいが、太陽と釈迦牟尼、太陽としての毘盧遮那、釈迦牟尼即毘盧遮那仏の宗教理念を、經典から引いて論述している。

宮坂有勝氏はその中で、釈迦が「日王種」あるいは「日種」であることを龍樹著鳩摩羅什訳『大智度論』（四〇二―四〇五年訳出）、安世高（バルチア出身 生没年不詳）訳『出家經』（一四八―一七〇年訳出）、『仏本行集經』あるいは『釈氏要覽』（二〇一九年撰集）及びプラナーナ文学などから引用説示し、インドの最古代王朝に日種と月種の二種類があり、日種王朝の祖が太陽神まで溯るとする伝承を、重要な古伝承としている。

また毘盧遮那が太陽を形容したものととして、仏駄跋陀羅訳『大方広仏華嚴經』六十卷（又は『旧訳華嚴經』、『六十華嚴』以下『六十華嚴』と表記 四一八年訳出）から次の頌を引いている。「盧舍那仏大智海 光明普照無有量如實觀察真諦法」 普照一切諸法門。さらに同經の「如来名号品」から「……或名釈迦牟尼；或名毘盧舍那……」及び、曇摩蜜多（ガンガール出身 三五六―四四二年）訳『觀普賢菩薩行法經』（四二四―四四一年訳出）からは「釈迦牟尼名毘盧遮那遍一切處其仏住處名常寂光」を引いて、釈迦牟尼即毘盧遮那を示し「明らかに人間釈尊を神格化し理想化したものがビルシャナ仏であることを示すものである。」<sup>(37)</sup>としている。

釈迦即ち太陽の思想は相当古くからあつたと見られるが毘盧遮那の思想は三世紀を溯ることはなく、仏教經典では『華嚴經』以前には見付けることができない<sup>(38)</sup>。この釈迦即毘盧遮那、つまり太陽崇拜の思想を溯ると、非バラモンの民族の太陽信仰に行き着き、そこにはアリアン系の宗教との根本的な相違点が浮上する。このことは非バラモンの民族の崇拜する太陽神を、仏教の主尊である釈迦と結び付けることにより、民族思想と仏教の習合を図つたものに他ならない。

ともかく太陽即釈迦牟尼と毘盧遮那とを結ぶ思想が相当古くから西域地方に存在し、仏身論から見ればやがて、『梵網經』では毘盧舍那仏は報身仏、『華嚴經』では法身仏と解釈されるに至つた。



さて奉先寺銅の毘盧遮那仏は、主尊に対し矛盾する脇侍の関係を  
取り沙汰する前に、蓮華座の一弁毎に彫像された化仏を指して『梵  
網經』の蓮華藏世界海を表現したものとし、毘盧遮那仏と断定して  
きた。これはほぼ定説となっている。この理解の前提には、化身の  
解釈が必要となる。仏の化身については神変に関連して『大智度論』  
『小品般若經』等の經典に説かれているが、經典以前では既に、ジ  
ヤータカの含衛城の釈迦の神変にその代表的な釈迦說法の場面があ  
る。

蓮華座の一弁毎に彫像された化仏は一体何を表現し、また『梵網  
經』の蓮華藏世界海とは、經典にはどのように記述されているので  
あろうか。經典を中心に化身について少し見ていきたい。

鳩摩羅什訳『梵網經』(四〇二―四二二年訳出)「盧舍那佛説菩  
薩心地戒品第十卷」上には「住蓮花臺藏世界海」。其臺周遍有千  
葉。一葉一世界為千世界。我化為千釋迦。據千世界。後就一  
葉世界。復有百億須彌山百億日月百億四天下百億南閻浮提。百億  
菩薩釋迦。坐百億菩提樹下。各説汝所問菩提薩捶心地。其餘九  
百九十九釋迦。各各現千百億釋迦。亦復如是。千花上佛是吾化身。  
千百億釋迦是千釋迦化身。吾已為本原。名為盧舍那佛。爾時蓮  
花臺藏座上盧舍那佛。廣答告千釋迦千百億釋迦。……とある。こ  
の經では毘盧遮那の化身を釈迦としており、毘盧遮那は蓮花台藏世  
界海に住む。其の台の周囲は千葉で巡らされ、一葉が一世界で千世  
界ある。そして毘盧遮那は千釋迦に化身し、千の世界を作り、百億  
の菩薩釋迦となつて百億の菩提樹の下で說法をして、さらに各々千  
百億の釈迦を作る。また千の花上の仏も毘盧遮那の化身で、千百億  
の釈迦は、千釋迦の化身であるとする。このように次々と、化身の  
釈迦が登場する。

毘盧遮那仏は、花の上にも葉の上にも化身の釈迦を現して說法を  
するが、この場面に至るまでに、ある状況設定がある。それは、釈

迦牟尼が、摩醯首羅天王宮で菩薩衆に蓮花台藏世界盧舍那仏所説心  
地法門品を説いていたとき、釈迦の身体から放った慧光がこの王宮  
から、蓮花台藏世界に届いた。またその時菩薩衆の一人も金剛白雲  
色光を放ち世界中を照らしたら、毘盧遮那仏が蓮花台藏世界百万億  
紫金剛光明宮中の百万蓮花赫赫光明座に坐しているのが見えた。皆  
この光はなにかと疑問を持ったので、釈迦は毘盧遮那仏に質問した。  
質問に喜んで、毘盧遮那仏は化身を現じて釈迦達に說法を始めたの  
である。<sup>(40)</sup>

この經では毘盧遮那は訳して淨満といい、蓮華台藏世界で成道し  
た報身仏としている。

卷の下でも同様な化身は登場するが、ここではまず毘盧遮那仏が  
千花上の仏に対して心地法門品を持して千百億の釈迦に伝教するべ  
きことを告げる。次ぎに釈迦牟尼仏の南閻浮提迦夷羅國下生、金剛  
座上成道、菩提樹下重説を唱え、戒律を説くが、毘盧遮那仏の本説、  
釈迦菩提樹下の重説が特徴となっている。

「爾時釋迦牟尼佛。從初現蓮華藏世界。東方來人天王宮中説魔  
受化經已。下生南閻浮提迦夷羅國。……七歲出家……と釈迦牟尼仏  
について説明している部分では、釈迦の出家年齢を七才とし、鳩摩  
羅什の出家歳に重なっている。釈迦の出家は二九才とするのが今日  
の常識であるから、記述されている釈迦はこの經の訳出者、鳩摩羅  
什自身のことではなからうか。

鳩摩羅什はクチャの出身で、カシュガル、ヤルカンド、カラシャ  
ール等、四―五世紀の西域諸國に所縁のあつた僧である。『梵網經』  
での毘盧遮那仏は、仏陀の諸國を統率するという、中心的、超越的  
なものとなつており、先に見た『出家經』や『觀普賢菩薩行法經』  
などのように釈迦即ち毘盧遮那という関係ではない。釈迦の仏國土  
をも統率しつつ、釈迦の報身となるという矛盾が見え隠れするが、  
釈迦をも包摂する絶対性を打ち出している。

『梵網經』訳出者では、鳩摩羅什以前の代表としては、大月支出

身の支謙<sup>しけん</sup>がいる。支謙は月支の僧支婁迦讖<sup>しろうかせん</sup>の弟子支亮に師事し、二二三年から二五三年の間に『梵網經』を訳したと見られるが、その間に『阿弥陀經』などを訳出している。支婁迦讖は『般舟三昧經』によつてはじめて中国に阿弥陀仏の淨土信仰をもたらしたことで知られる。阿弥陀仏もその起源を太陽神に求められるが、支謙訳の『梵網經』には毘盧遮那仏についての記述がないことは注意すべきであろう。『梵網經』は偽經とされ異訳も多いかもしれないが、鳩摩羅什が毘盧遮那仏を『梵網經』で説いたことは、大きな特徴ともいえ、その後の仏教思想に大きな影響を与えている。また鳩摩羅什は今まで見てきたように、多くの弥勒經や毘盧遮那に関する經典を訳出してきた。僧侶の出身や、活躍の場は、地域の民族思想と仏教の融合に大きな役目を果たす要となり、僧侶の活躍、特に翻訳は、僧侶自身の理念思想を織り込む良い機会であり得た。

はたして奉先寺の仏龕は『梵網經』の化身や説法の様子を表現しているのだろうか。

化身にはまた別に釈迦の分身がある、釈迦が釈迦の化身を現じる、神変を現す場面で登場する。神変については梶山雄一氏の論文「神変」<sup>(42)</sup>に詳しい。その中で『大品般若經』『大智度論』などを挙げているので、各經典から化身を説く部分のみを拾ってみたい。

鳩摩羅什訳『大品般若經』（四〇二―四二二年訳出）では、「…微笑する釈尊の舌根から無数の光明が放たれた。その一つ一つの光の表面に無上の宝からでき、金色の輝きを持ち、千葉のある諸蓮華が生じていた。それらの蓮華には仏の分身たちが坐つて、法を説いていた…」。

『大智度論』では「…仏身の三十二相の二より光明を放つ。…釈迦仏のすべての毛孔は微笑して光明を放つ。…釈迦仏は各面一丈の常光明を放つ。…釈迦仏はその舌によつて三千大千世界を覆つて微笑し、放光する。一々の光線から千葉の宝蓮華が生じ、その蓮華

には無数の釈尊の分身が坐っている。この化仏たちは六波羅蜜について法を説く。…」とあり、この二經における場面では、光明が釈迦仏の化仏を生む、つまり光明が化仏による説法の声と成ることを説いている。

同じく鳩摩羅什訳『法華經』（四〇六年訳出）では「…釈尊は白毫から一条の光明を放つと…諸世界から諸仏は各々の従者をつれて娑婆世界の釈迦牟尼仏のもとへ集まつて来る。…」とあり、同じような場面ながら、化仏は生じないばかりか、各仏国土から、各如来が現じるのである。

このように同じ化仏でも毘盧遮那の化身、釈迦の分身、あるいは仏身論的に法身、報身、応身など様々に解釈されるので、蓮華座の一弁毎に彫像された化仏については、本尊如何となる。

つぎに『華嚴經』での化身を考察する前に、人中像に関連して『華嚴經』に説かれる、毘盧遮那の身軀に表現するべく特別の瑞相文を經典から確認しておきたい。尚、実叉難陀<sup>じつしやなんだ</sup>（コータン出身 六五二―七一〇年）訳『大方広仏華嚴經』八十卷（又は『新訳華嚴經』、『八十華嚴』以下『八十華嚴』と表記）は七一〇年に訳出が完成しているがこの年は仏龕創建の二四年後であるので、当面は対象から外し、『六十年華嚴』のみを見ていきたい。

『六十華嚴』卷第三「盧舍那佛品第二之二」では「…諸世界海有種種形。或方或圓。或非方圓。或水洄復。或復如華形。或種種衆生形者。…刹海無量。殊形異莊嚴。十方世界海。見諸難種相。或圓或四方。或復非方圓。三級及八隅。若摩尼寶。一切諸業海。種種別異故。有如金剛掌。莊嚴坦平正…」

「盧舍那佛品第二之三」では「盧舍那佛遍十萬。出一切化莊嚴身。彼亦不來亦不去。佛願力故皆悉見。一切佛刹微塵中。無量佛子修諸行。悉受清淨國土記。見嚴淨刹稱本行。或有世界性蓮華上住。或在無量色蓮華上住。或依眞珠寶住。或依諸寶網住。或依種種衆生身住。或依佛摩尼寶王住。或須彌山形。或

河形。或轉形。或旋流形。或輪形。或樹形。或樓觀形。或雲形。或網形。<sup>(44)</sup>と世界海の種々の形を説明している。毘盧遮那の身体に表現することは「無量無邊 諸世界海 盧舍那佛 悉能嚴淨…於其身内 容一切刹」<sup>(45)</sup>とある。

そして毘盧遮那の特徴については次のように説いている。

「世間淨眼品第一之一」では「如來法身等法界普應衆生悉對現 如來法化衆生 隨順諸法悉調伏」<sup>(46)</sup>。

「世間淨眼品第一之二」では「如來普為出興世 遍照十方悉無餘 如來法身無等等 以無上智演說法」<sup>(47)</sup>。また「佛慧無邊等虚空 如來法身不思議 故能顯現照十方 明淨眼王妙法門」<sup>(48)</sup>。

「盧舍那佛品第二之一」では「盧舍那如來 轉清淨法輪 一切法方便 如來雲普復 十方國土中 一切世界海 佛願力自在 普現轉法輪」<sup>(49)</sup>。また「法身充滿諸法界 一切十方佛國土 遍遊一切衆生海 安住深妙清淨法 普放光明如大雲」<sup>(50)</sup>。また「一切三世諸如來 自在普現無量刹 一境界一切佛 莊嚴刹海皆悉見過去未來現在劫 一切十方諸世界 於無量劫淨莊嚴 一佛刹皆悉見」<sup>(51)</sup>とあり、『華嚴經』での法身毘盧遮那仏はつまり、一切諸仏の住する十方諸世界や、宇宙までも包摂する法界に他ならず、過去、現在、未来をも超越して説法をしているという。しかしながら同經典には先にも触れたように「大方廣佛華嚴經如來名號品第二」で無量の名号を挙げるなかで「諸佛子。此四天下佛號不同。或稱悉達。或稱滿月。或稱師子吼。或稱釋迦牟尼。或稱神仙。或稱盧舍那。或稱瞿曇。或稱大沙門。或稱最勝。或稱能度。如是等稱佛名號其數一萬。」と述べ、釈迦と盧舍那を同一尊格としている矛盾を見せている。仏名としては唯一釈迦牟尼を挙げるが、特に釈迦に特定していることは、釈迦の幼名悉達と、併せてゴータマという釈迦の姓の音訳である瞿曇を加えていることからうかがうことができる。

『六十華嚴』の訳出者、仏駄跋陀羅は、北インド出身で、出家し

てガンダーラに赴くが、四〇六年に長安に来て、鳩摩羅什と親交を結んでいる。經典の訳出では鳩摩羅什が『梵網經』を四〇二年から四一二年にかけて行ない、仏駄跋陀羅は支法領<sup>しほうりょう</sup>がコータンで得た『華嚴經六〇卷』を四一八年から四二〇年にわたって行っている。この二人が親交を結び始めたころ仏駄跋陀羅はまだ『六十華嚴』の訳出に取り掛かっていた。仏駄跋陀羅は天竺禪師とも呼ばれていた。

『六十華嚴』での毘盧遮那仏は法身で、全てを包括する法界そのものであるが、やはりここでも釈迦との関係は断ち切れず、名号を違える同格尊と解釈されている。

このように『梵網經』と『華嚴經』に説かれる毘盧遮那仏は、太陽神とも、弥勒仏とも同格とはされないが、超越的な仏教尊として重要な位置を与えられた。しかし結局は、釈迦と毘盧遮那が一体ということである。

このように考察してみると、奉先寺洞の本尊毘盧遮那仏はまず人中像でないことは明確である。人中像を華嚴教主の毘盧遮那仏と解釈すれば、この像は『華嚴經』によるものとは考えられないが、法界毘盧遮那仏の報身である、釈迦仏とすれば問題はない。

また大きなことは、当時の皇帝崇拜の風潮と対応し、弥勒仏、転輪聖王、毘盧遮那仏という流れも考えられる。両脇侍をいかにも写實的な二人の釈迦弟子に彫り上げているのは、釈迦を意識していることと思えるが、当時は弥勒の両脇に、羅漢像を配すのは珍しいことではなかった。

あるいは後世に加えられた阿弥陀等身立像と共に仏龕を一体として考えれば阿弥陀仏でもよいわけである。また台座蓮弁一枚毎の化仏を釈迦と解釈して『梵網經』を所依經典と見做すことはできるが、先にも見たように他の經典を所依としても釈迦としての解釈は可能であり、化仏を化身と見れば本尊は毘盧遮那であり、分身と見れば釈迦である。

ここで今一度『華嚴經』の解釈に照らして見よう。報身仏釈迦を法界である毘盧舍那とすれば、その蓮華藏世界の周辺に表現された、蓮弁一葉毎の化仏は、諸仏の仏国土を化仏で表現したものと考えられるが、その場合化仏は釈迦ではなく、十方の諸仏に匹敵することは言うまでもない。毘盧遮那仏は超越的立場から常に説法をしているので、大像龕全体は、釈迦説法の場面で何等矛盾はない。

この説法の場面とは、仏が成道後、毘盧遮那法身として海印三昧中に在りながら大菩薩に対して法を説いた、いわゆる会座の情景であり、その説処を『六十華嚴』では七所八会、『八十華嚴』では七所九会とする。

その各々で釈迦は文殊と普賢を脇侍菩薩とし、また十大弟子の内、須菩提又は目犍連と舍利弗の二比丘を伴い、諸菩薩に説法する。それは菩提道場会、普光法堂会、問利天宮会、夜摩天宮会、兜率天宮会、他化自在天宮会、逝多園林会の七所に共通するが、「十地品」においては、特殊な二菩薩である金剛藏菩薩と解脫月菩薩が脇侍となる。前者は釈迦の説法の代弁者であり、後者は諸菩薩の代弁者である。

これらの諸会座を一画面に表現したものに華嚴經変相図がある。現在する絹本では五代時代のギメ美術館蔵の『華嚴經変相 七所八会』（図15）と『華嚴經十地品変相』が挙げられる。華嚴經變相図は最古のものでも盛唐期を遡るものではなく、敦煌莫高窟第四窟の壁画に認められる。<sup>(53)</sup> いずれも『八十華嚴』によるもので、一会座毎に法界毘盧遮那仏の報身としての釈迦像を中心にした説法場面が描かれている。この本尊を釈迦とし、別の人中像を毘盧遮那仏と説くことで、『華嚴經』では法身と報身の二尊の存在が認められる。

またこのような釈迦説法図と毘盧遮那仏を同時に表現したものが、『報恩經變相』（図14・16）である。この図の概要は、内陣上段に説法する釈迦を中尊とした五尊像が、下段には毘盧遮那仏を中尊とし菩薩と比丘を脇侍とする三尊像が描かれている。毘盧遮那仏の衣には仏教世界を象徴する様々な図形が表現されており、釈迦と毘

盧遮那が同一尊でありながら、図像的には全く異なった尊様で區別して描かれている点で、『華嚴經』の經典内容と類似している、又図5及び図7のごとくの人中像と如来像の並像も同様と思われる。

奉先寺の仏龕を『華嚴經』により造建したものとするれば、この釈迦を主尊とした会座の場面と考えられはしないか。両菩薩が文殊と普賢であっても、又金剛藏菩薩と解脫月菩薩であっても、この二菩薩の存在は重要となる。

では奉先寺洞の大像は、なぜ釈迦如来とせず、毘盧遮那と称されなければならないのか。

#### 4、毘盧遮那仏の名称と像龕記及び僧侶の関係

唐代は隋代に引き続き中国仏教の、宗派の成立大成が為された時代であった。中国国内では仏教伝来より以来、外来僧の訳経による經典が多くもたらされたが、外国仏教を脱して中国仏教独自の立場に立ち、いよいよ国家仏教として都合良く融合させるべく、自国の僧侶による經典訳出をはじめ、教義の整理と共に総合体系化が不可欠となった。

毘盧遮那像龕建立中及びその前後には、特に皇室の簞を受けていた華嚴宗と禪宗の中国僧達がいた。杜順（陝西省西安府出身 五七七―六四〇年）について出家した、智儼（甘肅省秦州西南出身 六〇二―六六八年）は高宗の庇護のもとで華嚴宗成立の基礎を築いた。その弟子の法藏（長安出身 六四三―七二二年）は『華嚴經』の講説に熱心で、咸亨元（六七〇）年に則天武后の勅により出家している。当時法藏は二七―八才であった。実叉難陀の『八十華嚴』の翻訳を義浄、菩提流志らと共に助け、その後『八十華嚴』の講義を行うこと数十回におよび著書も多かった。中宗、睿宗の戒師となりまた国一法師の号を受けている。また華嚴經變相の創作者ともいわれ

ている。

禪宗では北宗禪の神秀<sup>じんしゅう</sup>（河南省開尉氏県出身 六〇六―七〇六年）がいる。五〇才で弘忍（江西省九江県出身 六〇一―六七四年又は六〇二―六七五年）に師事する以前、既に道教、儒教、仏教の三教に精通していたといわれる。則天武后に招かれ、武后、中宗、睿宗三帝の国師となった。弟子に義福（山西省出身 六五八―七三六年）と普寂（山東省永済県出身 六五一―七三九年）がいる。共に信任を得て三帝の門師となった。

浄土教では毘盧遮那大像の造像に際して檢校に任ぜられた善導（安徽省泗州又は山東省臨淄出身 六一三―六八一年）である。善導は口称念仏を世に勧め、阿弥陀經の書写一〇万巻と、浄土変相図の制作三百余冊に及ぶ。我國の当麻曼荼羅形式の創作者といわれる。これら中国人僧侶の擁護は、唐朝の仏教保護の政策であつたことは言うまでもない。

善導がなぜ大盧遮那造像に際して檢校に選ばれたのであろうか。そしてまたここに挙げた僧侶のうち、何人かが関わつたのであろうか。疑問な点も残るが、皇帝崇拝即ち当今如来の思想を背景に、毘盧遮那大像は帝王と重なつた釈迦の尊像を以て顕造された。本尊が大像であるのは、弥勒としての從來の大きさからではなく、法界即報身としてのイメージであつたのなら、斬新な発想といえよう。

高宗に忠実で、造像に関与した僧侶や技術者の中には中国人ばかりではなく、外国人も多くいたのであろう。特に本尊の波状の頭髮と通肩、また唐様な写実性を持ちながら、はつきりした顔立ちなどにガンダーラ仏を彷彿させる雰囲気漂う。

中国の禪宗においてはその元は、中国初期仏教の請来者、安世高と鳩摩羅什に続いて仏駄跋陀羅、仏陀禪師などが訳經等で活躍する中、菩提達磨が禪宗を伝えた。その法は慧可そして僧璨、道信、弘忍、神秀寺へと伝授された。神秀の後は義福と普寂がいたが、やがて北宗禪は衰運に向かう。この中の鳩摩羅什は『梵網經』を、仏駄跋陀羅は『六十華嚴』を伝えている。

華嚴宗の法藏は『六十華嚴』の講説と共に『八十華嚴』の訳出にも協力しているが、後継者はすぐには出なかった。やがて密教僧の活躍が目されることになる。

〈像龕記〉には今まで考察してきたように、咸亨三（六七二年）に、則天武后が脂粉錢二万貫を助成したこと、上元二（六七五年）に、仏龕が完成したこと、調露元（六七九年）年に奉先寺を建立し翌二年に高宗自ら額を書いたことが書かれ、仏像名は迦葉と阿難だけしか明記されていない。関わつた僧侶や技術者は、善道、惠暕、韋機、樊元則、李君贊、成仁威、姚師積等であつた。この碑文は（河洛上都龍門山之陽 大盧舍那像龕記）と題されているが、この像龕記がいつ刻まれたのかは判っていない。ただ末尾に補刻された開元十（七二二年）年十二月十二日の河南縣から奉先寺への牒によって開元十二（七二四年）年以降に刻されたと想像できる。

七二四年といえは仏龕完成後、五〇年近くが経過している。高宗は六八三年に崩じており、その後則天武后も崩じ、すでに玄宗皇帝の時代である。

唐朝の宗教政策は全ての宗教に対して抱擁的態度であつたが、しかし道教には特別な待遇であつた。それは開祖の李耳（老子）が唐王室と同姓という理由からである。社会上の勢力は仏教には及ばなかったが、道仏二教を一括して取り扱つた。

中国では東晋から南北朝を通して、仏教対儒教と道教の關係は、民族思想上或いは社会道德上、何らかの問題解決を必要としてきた。既に高祖が、道教・儒教・仏教の順位を示していたが、特に玄宗と武宗は深い道教信者であつた。

道教に熱心であつた玄宗は外国の僧侶の帰国令を勅令で配布しているが、仏教においては呪術的信仰に傾倒していたので、呪術的な要素の色濃い密教僧は加護された。

従つて当時龍門奉先寺を含む、洛陽あたりは唐代密宗の全盛期であつたことは言うまでもない。

まず則天武后の望みであった唐訳の『新訳華嚴經』が六九九年に訳出完了した。これには実叉難陀に、菩提流志(インド南部出身 五七二―七二七年)と義浄(山東省出身 六三三―七二二)、法蔵らが協力している。龍門山には菩提流志の訳経所のあったことも良く知られている。

そして開元十一(七二三)年には、玄宗の勅命により金剛智(インド中部出身 六七一又は六六九―七四一年 七二〇年渡来)が『金剛頂瑜伽中略出念誦法』『七俱胝仏母准泥大明陀羅尼經』を訳出し、翌年の開元十二(七二四)年には勅命により善無畏(インド東部出身 六三七―七三五年 七一六年渡来)と一行(河北省出身 六八三―七二七年 玄宗の勅命により七一七年洛陽に入る)が『大毘盧遮那成仏神變加持經』(以下『大日經』と略す)の訳出を完了し、その後七四三年には不空(インド南部出身 七〇五―七七四年 七二〇年洛陽に入る)が『金剛頂經』を訳している。

義福はまた金剛智の弟子でもあり、開元十一(七二三)年に洛陽に入り、入寂後は奉先寺北岡に埋葬されている。

『像範記』が刻まれたと思われる開元十二(七二四)年前後の、奉先寺周辺には、これらの僧侶が往来、在住していた。『像範記』はこれら密教僧により刻されたのである。

不空、一行、義福らの師、金剛智は入寂後の七四三年に奉先寺西岡に塔を立てられ、不空の要請に応じて、太宗は金剛智塔に額を賜っている。以後密宗金剛界の法裔は、金剛智塔の周辺に埋葬されるようになった。八五六年には我国の園城寺僧、円珍もこの地を訪れている。

毘盧遮那仏は密教經典の充実と共に主尊としての尊格が、いよいよ明確となり、万物を包摂し中央に位置するという方位性も確立されてくる。もはや一仏国土の如来にすぎない釈迦牟尼と、皇帝の一体化は許されない。毘盧遮那は超越的な法界そのものであるから、一国を建立し統制する皇帝の象徴としてはいかにもふさわしい仏像であった。中国皇帝の象徴であるのならなおさら、異国インドの教

祖釈迦の名を用いるわけにはいかない。この理念は密教僧の解釈によって、より確実に裏付けされたと思われる。

『像範記』が、その題目を『河洛上都龍門山之陽 大盧舍那像範記』としているのは、毘盧遮那を主尊とすることで、中国密教を顕示すると共に、唐代密教集団の金字塔的役割も果たしている。「陽」の一字は、太陽の意を現しているのだろうか。

善無畏、金剛智、不空は開元の三大士といわれ、特に金剛智の弟子不空はやがて中央仏教界に君臨し、約三〇年もの間朝廷に仕えた。後に恵果が出るがその伝法は我国の空海のみであった。中国密教は足早に通り過ぎて行く感があったが、大盧舍那像範記と題したこと、このように中国密教の隆盛を後世にまで伝達している。

## 結 び

『大日經』以前は大日如来は毘盧遮那仏と呼ばれていた。毘盧遮那仏というより、大日如来という名称の方が判りやすい。しかし、毘盧遮那は、原語ヴァイローチャナからの音訳である。その意味する要素の一つである太陽から『大日經』ではじめて「大日」と訳出されたが、經典内で僅か三カ所のみしか用いられていないのである。ところが「大日如来」は『大日經』に至って、その尊格が毘盧遮那仏とは大きく隔てられ、尊名までも変容した印象が残る。

考察してきたように毘盧遮那は、太陽、弥勒、轉輪聖王などに関つて来たり釈迦とも一体であった。やがて密教思想の確立と共に、中央に位置し、宇宙をも包摂する超越的存在となり、また何にも属さないが、全てに関ると言ういわば一切即一の立場が明確になる。

仏教思想の成立過程に伴っているのは、各地域での文化及び民族思想と仏教思想の融合あるいは習合で、そこで為されるのは全ての民族を摂取するべく知恵の練磨でもあった。その役割は当然僧侶であるから、仏教国家は仏教国家となるまでに、国権と僧侶の結び付きが不可欠である。

中国での習合では、土着の呪術及び道教や儒教との関りが問題となったであろう。龍門をはじめ多くの石窟では道教の徒が登仙している。その地に、多数の仏像を彫り込むことも仏教化への歩みであり融合であった。『六十華嚴』での名号で「或稱『悉達』。或稱『滿月』。或稱『師子吼』。或稱『釋迦牟尼』。或稱『神仙』。或稱『盧舍那』。或稱『瞿曇』。」とある中、神仙はいかにも中国的である、神仙も釈迦も盧舍那も一体ということはこの経を通して中国文化思想と仏教が習合されたことになる。

『六十華嚴』は、インド出身の仏駄跋陀羅により訳出されているが、求法僧の支法領から受け取ったこの経の原本は、支法領（三九二年に西域に派遣された）がコータンで得たものであった。経中の名号を見ると、盧遮那を太陽とすれば、釈迦も太陽である。つまり太陽神と仏教尊の融合であるが、悉達も瞿曇も釈迦のことであるから、釈迦との融合をずいぶん強調している感がある。コータン地方で華嚴の思想や、毘盧遮那の尊格が発祥したのは太陽神との習合を示すものであった。太陽神と仏教の習合を暗示させる経典を訳出している曇摩蜜多是ガンダーラ、安世高はペルシャ出身等々である。

しかし経典の中では、光明、遍照、仏光等々、光に関する記述はあるが、太陽そのものの名称は無い。その点が宮坂宥勝氏の「太陽を形容したもの」としている所以であろう。名号には、満月とあることから、仏光は月光と解釈することもできよう。

『梵網経』や多くの弥勒経典の訳出で活躍した鳩摩羅什はインド出身であるがクチャ地方に所縁の深い僧であった。当時の北魏はもともと遊牧民の鮮卑民族であったので、太陽とは結び付かなかつたが、鳩摩羅什は皇帝崇拝を重んじ、皇帝と仏教尊を結び付ける大きな役割を果たしたと言える。

このような流れを複雑に織り成し、中国仏教教理の充実過程の中で、奉先寺洞の大像龕は造立された。尊像群の様相は迦葉と阿難及び二菩薩を脇侍とする釈迦牟尼仏の説法場面であるから、主尊の尊

容は釈迦牟尼仏の形態を取るが、本尊を釈迦とはせず、あえて毘盧遮那大像と、今日呼称しているのは、創建より後に密教僧が刻んだ像龕記によるものと言わざるを得ない。

中国において初めて皇帝と毘盧遮那仏がこのように習合された。ただし「現図」での大日如来のごとくは菩薩形を用いている。このことは中心に位置するべく実在人物を暗示していると思われる、それが国王であるかもしれない。経典にはしばしば毘盧遮那仏の台座を「獅子之座」としているがこの台座は「玉座」を意味している。弥勒即転輪聖王と比較しながら、皇帝即毘盧遮那仏の思想の発祥を考察する必要がある。

(続く)

## 注記

(一) 我国における文献上と現存の毘盧遮那仏像について

①文献上に見る毘盧遮那仏

我国の文献上に残された毘盧遮那仏をほぼ年代順に見ていくと、次のようなものが挙げられる。

例1 河内国大県郡 知識寺 木造盧遮那仏

知識寺に木造盧遮那仏が安置されていたであろうことは、『続日本紀』天平勝宝元年二月丁亥(七四九年二月二七日)条の聖武天皇の八幡神を敬う詞として「去辰年河内國大県郡乃智識寺爾坐盧舍那佛遠禮奉天則朕毛欲奉造止思登毛得不為之間爾」(『続日本紀』(朝日新聞『六國史』巻三)三七四頁八行目)と記述されている事からうかがうことができる。聖武天皇が天平一二年二月甲子(七四〇年二月七日)難波宮へ行幸され智識寺を参拝された時には存在していたと思われる。

現在智識寺跡に当たる、大阪府柏原市太平寺町の石神社には次の

ようは揭示がある。

# 「大阪府指定文化財

知 識 寺 東 塔 刹 柱 礎 石

石 神 社

知識寺は奈良・平安時代河内を代表する大寺院で、東大寺大仏造  
顕の機縁となった大仏を本尊とし、聖武・孝謙帝・藤原頼道など  
の参詣、法華寺への銅の運上といった動きが知られています。

伽藍は東・西二塔をもつ薬師寺の配置で、この刹柱礎石は、東  
塔跡と推定される、太平寺二丁目一八―七、山本義一氏宅地東南  
角の土蔵付近から出土したものです。花崗岩製で、この塔心礎の  
柱穴の直径は一二センチあり、この上に建てられていた塔は、  
高さ四八、八メートルの五重塔であったと推定されます。

知識寺の大仏は高さ一八メートルと伝えられ、この礎石から  
推定される塔も、そうした巨大な仏像を本尊とする大寺院にふ  
さわしい大きさです。

一九八九年三月

大 阪 府 教 育 委 員 会  
柏 原 市 教 育 委 員 会

智識寺跡

この付近一帯には「智識寺」と呼ばれる、有名な古代寺院跡  
があり、地名から太平寺廃寺とも呼ばれています。

奈良時代、聖武天皇や、孝謙天皇は、平城宮と難波宮の途中に  
柏原の地を訪れ、智識寺、山下寺、大里寺、三宅寺、家原寺、  
鳥坂寺の六寺に禮拜、禮仏されました。中でも智識寺には大き  
な盧舎那仏があり、それを見た聖武天皇は、その立派さに感動  
し、奈良東大寺の大仏を造るきっかけとなりました。

智識とは、仏者を信仰し寺や仏像を造ることに協力した人の  
ことであり、智識寺は、これら智識によって建てられた大規模  
な寺院でした。

智識寺は、東西に二塔を配する薬師寺式の伽藍配置であつ  
たと推定され、東塔跡の一部が、過去に調査されています。出  
土した瓦から、千三百年以上前の飛鳥時代末頃に創建され、室  
町時代頃に廃絶したようです。

石神社の境内には、東塔に使用されていた塔心礎を始めと  
する礎石が移されています。

平成七年三月

柏原市教育委員会

(一九九五年一月二六日、現地にて写記)

尚、智識寺の本尊は、大像の塑造観音菩薩立像であつて、毘盧遮那  
仏は木造坐像で、特に大像ではなかったという見解を、安達康  
氏は『日本仏教彫刻史』で論述している。

## 例2

奈良 東大寺 銀堂 銀造盧遮那仏

『東大寺要録』巻第四「諸院章第四附神社 千手堂銀堂」には、「…  
銀盧舎那仏一體等身金銅座一具華葉八十六枚…」(『東大寺要録』  
)(『續々群書類従 第十一』六四頁、上段二―一頁)又、『南都七大  
寺巡禮記』「東大寺 銀堂」では「…之本尊丈六舎那佛口傳云依「安  
銀佛」名「銀堂」…」(『南都七大寺巡禮記』)(『續々群書類従 第  
十一』五五五頁、上段七行目―八行目)と記載され、東大寺の銀堂  
に、銀の等身大或いは丈六の盧舎那仏が安置されていたようだが、  
両書のうち「東大寺要録」の「一體等身」の記述のほうが信憑性  
があるように思われる。千手堂の初見は『東大寺要録』では天平一九  
年(七四七)であるから当初から安置されていたれば、大仏以前には  
存在していたことになる。

## 例3

奈良 大安寺 華嚴院 盧舎那仏

大安寺に盧舎那仏が造られたことは、『正倉院文書』による「奉造  
盧舎那佛像「料」(田村寛康「奈良時代東大寺盧舎那仏の両脇侍像に  
ついて」(『佛教藝術』一一〇号 毎日新聞社 一九七八年、七八  
頁)の記述からうかがうことができる。



例4 奈良 法隆寺上堂 木造盧遮那仏坐像

この像は現在、左脇侍文殊菩薩坐像と右脇侍普賢菩薩坐像と共に釈迦三尊像と呼ばれ、現存しているが、文献では、嘉禎四年(一二三八)の顕真著『聖徳太子伝私記』に「上ノ堂ノ丈六ノ金色盧遮那脇士二軀仕者二軀普賢・文殊」(前掲論文「奈良時代東大寺盧舎那仏の両脇侍像について」七八頁)と記述されているように、本尊は鎌倉時代には盧舎那仏と呼ばれている。それ以降も、盧舎那仏を本尊とし脇侍を文殊・普賢とする記録があり、釈迦如来の名は文献上あらわれていないようである。一〇世紀頃の作とされる(前掲論文「奈良時代東大寺盧舎那仏の両脇侍像について」七八頁)。

例5 奈良 東大寺 南阿彌陀堂 盧舎那浄土

『東大寺要録』巻第四「諸院章第四 附神社 南阿彌陀堂大風仆」には「盧舎那浄土三枚」(『續々群書類従 第十一』六三頁、上段一二行目)とあり、盧舎那浄土図の存在も認められる。

例6 京都 円宗寺 金堂 二丈金色盧遮那仏

延久二年(一〇七〇)、後三条天皇による造立(高木豊・坂輪宣敬『如来—信仰と造形—』(『東京美術選書 51』)東京美術 一九八七年、一四七頁)。

例7 京都 法勝寺 金堂 三丈三尺金色盧遮那仏坐像

『扶桑略記』第三十「承暦元年の条」(『扶桑略記』第三十 承暦元年条)に見られる、白河天皇の発願により承暦元年(一〇七七)、京都白河の地に建立供養した、三丈三尺金色盧遮那仏坐像。

例8 京都 方広寺 大仏殿 木造六丈三尺盧遮那仏

豊臣秀吉が天正一四年(一五八六)発願し天正一七年(一五八九)に造寺造仏を完成させた。これは『華嚴經』の教主とされ、文祿五年(一五九六)秀吉はこの大仏殿で千僧供養をした。尚、平清盛もっている(前掲書『如来—信仰と造形—』一四八頁〜一四九頁)。

その他『延喜式』第十三圖書寮の条では修法について述べている(『延喜式』(虎尾俊哉『日本歴史叢書 8』(『日本歴史学会編』))。

以上文献に残されている毘盧舎那仏を見てきたが、次に現存する作品を挙げていきたい。

②現存する毘盧舎那仏

例9 奈良 東大寺 金堂 金銅鍍金造 盧遮那仏坐像(図1)

現存する最も代表的な盧遮那仏である。三尊像で現在左脇侍は木造如意輪観音坐像、右脇侍は木造虚空蔵菩薩坐像となっている。本尊盧遮那仏の完成開眼供養は天平勝宝四年四月乙酉(七五二年四月九日)。両脇侍は『七大寺巡禮私記』(『校刊美術史料』寺院編上巻)三三頁、一三行目〜一五行目・『東大寺要録』(『續々群書類従 第十一』)巻一「本願章第一孝謙天皇条」一三頁、下段、六行目〜七行目。同、巻七「雜事章第十 大仏殿納物条」二二九頁、上段、四七行目〜行目によると、天平勝宝元年(七四九)四月八日から天平勝宝三年(七五一)九月二三日に制作されている。像高は本尊盧遮那仏が一五〇〇cm・銅台座は三〇〇・一cm、如意輪観音坐像は七二・五cm、虚空蔵菩薩が七一〇・〇cmである。尚、光明皇后は故聖武天皇の菩提をとむらうため、天皇の遺品を東大寺に献納しているが『東大寺献物帳』(『国家珍寶帳』)の巻首に次のような記述があり、盧遮那仏の脇侍を文殊・普賢と描らえている点注目したい。「速到花蔵之寶。恒受妙樂。終遇舍那之法筵。将普賢而宣遊。共文殊而展化。…」(東大寺の脇侍についての研究では、前掲論文「奈良時代東大寺盧舎那仏の両脇侍像について」に詳しい。脇侍についての若干の考察を進める上で、東大寺盧舎那の両脇侍菩薩が観音・虚空蔵であることから、関連性のある三尊像を挙げてみると、次のことくである。

■奈良 興福寺 東金堂背面 釈迦三尊像…欽明一三年(五五二)『七大寺巡禮私記』『扶桑略記』『興福寺流記』では、興福寺 東金堂

金銅尺迦坐像高三尺許。蓮華座有垂裳。金銅脇士并立像左觀世音。右虚空藏。斯像者。本朝第卅代主欽明天皇御宇十三年壬申十月從百濟國所奉渡也。如來入滅之後。當於一千四百八十年。此像始來給。仍日本初佛像是也。就中二并像不可思議也。此三尊者中尊之後東向所安置也。」とある。

田村氏はこの像の造立が五五二年である事に、信憑性なしとしている。

■檀造釈迦三尊像：弘仁四（八一三）或いは弘仁元（八一〇）年

『遍照發揮性靈集』「卷六」によると東太上天（嵯峨上皇）が故中務卿（伊予親王）のために「釈迦曼荼羅」を造刻したとある。

「東太上天為故中務卿 親王造刻檀像願文

所以。為故中務卿 親王及故夫人藤原氏。敬造刻檀釋迦牟尼佛像一軀。觀世音菩薩像一軀。虚空藏菩薩像一。竝金銀泥畫四大忿怒王像四軀。四攝八供養八大天王像等。各副法曼荼羅。三昧耶曼荼羅。」

上記二体の釈迦如来においては、観音菩薩と虚空藏菩薩の両脇侍を随侍している。この脇侍は、東大寺盧遮那仏の二脇侍と同じである。この二体の釈迦如来の脇侍は、真言密教の影響を受けたものか、或いは東大寺の三尊像もその主尊が釈迦如来であつても良いのか、或いは呼称の相違だけで、盧舍那の報身としての釈迦如来と見做していたのであつたのか、この疑問は本論の課題点であるので、東大寺盧遮那仏の章で、仏像の詳細についてと共に考察をする。

#### 例10

奈良 唐招提寺 金堂 脱活乾漆箔造盧遮那仏坐像(図2)

制作年代はまだはっきりしないが天平宝字三（七五九）年頃とされる。現在は、左脇侍に大同・弘仁頃の作とされる木心乾漆薬師如来立像、右脇侍には天平宝字三年から大同・弘仁頃の作とされる木心乾漆千手観音立像が安置されている。像高は盧遮那仏三〇・四・五cm、薬師如来三三・六・五cm、千手観音五三・五・七cm。この三尊像のありかたは『招提千歳傳記』巻下之一「殿堂編 金堂」（『招提千歳傳記』）に見られるように、唐招提寺独自の様式とされるが、『要

録』「卷第四 諸院章第四」に次のような記述があり、東大寺西南院の釈迦如来の両脇には薬師如来と千手観音像を配した例がある。「一、西南院：即奉安<sub>ニ</sub>丈六金色釋迦如来像藥師如来像千手観音像等<sub>一</sub>也。」（『續々群書類従 第十一』六九頁）。

例11 福岡 観世音寺戒壇院 木造盧遮那仏坐像(図3)

現在は観世音寺から独立している戒壇院に、左脇侍木造文殊菩薩立像と右脇侍木造弥勒菩薩立像と共に安置される三尊像。本尊は藤原時代の作とされ、脇侍は共に元禄一二（一七〇〇）年の作である。像高は盧遮那仏は一四八・五cm、文殊菩薩一四六・五cm、弥勒菩薩一四七・五cm。

その他次の二体を掲げておくが詳細は不明である。

例12 静岡 慈光院 木造盧遮那仏坐像

造像銘のある寛文一三（一六七三）年の作。像高は二〇〇cm。

例13 滋賀 狛坂 摩崖仏座像

かつての信楽宮付近の石造浮彫りで、脇侍菩薩立像二軀と共に、狛坂摩崖三尊仏と呼ばれる。同石上部に、化仏の三尊仏二組と菩薩像四体が浮彫りされている。全高六三〇cm・像高は二一八cm。この地は当初東大寺大仏の造り始められた甲賀寺跡に近く、この本尊を盧舍那仏とする見解もある。

以上我国に現存する毘盧遮那仏像を挙げた。次に西域における毘盧遮那仏について見ていきたい。

(2) 西域における文献上と現存の毘盧遮那仏像について

①文献上に見る毘盧遮那仏

西域とは現在の中国となるが、ここでは、かつてのクチャやコータン、

カラシヤール地方を含む地域と考える。まず文献に残されている知り得た尊像を挙げてみたい。  
『法苑珠林』『広弘明集』『盧山記』『廣清涼傳』からは次の記述が挙げられる。

『法苑珠林』『広弘明集』

例14 隋の開皇年中に、行像から坐像に改められた、五丈(約一五m)の本造盧舍那仏(杉山二郎『大仏建立』学生社 一九八六年、十一月、二二九頁)。

例15 隋の開皇一七(五九七)年に襄州で作られた、像高一二丈(二七m)の脱乾漆盧舍那仏(前掲書『大仏建立』二二九頁)。

例16 唐代、梵雲寺で造られた五九尺の大像(前掲書『大仏建立』二二九頁)。

例17 梓州通泉寺で僧慧震が摩崖に造立した、像高一三〇尺(約九九m)の盧舍那仏坐像(前掲書『大仏建立』二二九頁)。

例18 貞觀八年(六三四)に開眼した盧舍那仏(前掲書『大仏建立』二二九頁)。

例19 鹿隣德頃(六六四年)一二五〇年間かかって造った七〇尺の大鉄仏(前掲書『大仏建立』二二九頁)。

例20 『盧山記』第一集  
盧山乾明寺に、張僧繇の所画に係る盧舍那仏像の安置(『望月佛教大辭典』5 四三六九頁)。

例21 『廣清涼傳』卷中  
五台山瑞相殿北の十三重大仏殿中に盧舍那仏像を安じ、且四周に一万の菩薩像を彫造(『望月佛教大辭典』5 四三六九頁)。

これらは盧舍那仏という名称で記述され、特に例14から例19までは、あえて大きさが示されて、巨大仏としての盧遮那仏像の例として見る事ができる。

毘盧遮那仏はまた經典や文献の上からは人中像あるいは毘盧遮那法界人中像などと呼称される場合もある。この人中像の教理的解釈と圖像の關係は本文に譲るが、ここでは人中像としての毘盧遮那仏の記述を文献から見ていくと、『梁高僧傳』、『洛陽伽藍記』、『金石萃篇』、『陶齋藏石記』等から例を挙げる事ができる。これらは吉村伶氏の論文「盧舍那法界人中像の研究」(『美術研究』第二百三號 吉川弘文館 一九七五年十一月、二二五頁―二二九頁)に詳しいので、参照しながら考察すると次のごとくである。

例22 『梁高僧傳』卷七 釋僧詮傳

誤地昔の誤の国の地方。今の江蘇省一帯、虎丘山の東寺に安置された、東晉末頃の僧詮晚年造像の人中金像(前掲論文「盧舍那法界人中像の研究」二二五頁、下段、八行目―九行目。「…初止閑居寺晚憩虎丘山、詮先於黃龍國造丈六金像、入誤又造人中金像、置虎丘山之東寺、…」)。

例23 『洛陽伽藍記』第二 崇真寺條

洛陽城西、禪林寺の道弘造像の人中像十軀(前掲論文「盧舍那法界人中像の研究」二二六頁、上段、六行目―七行目。「…造一切經人中像十軀…」)。

例24 『洛陽伽藍記』第四 永明寺條

洛陽城西、景略の前廳に安置された孟仲暉造像の、人中夾紵像(前掲論文「盧舍那法界人中像の研究」一八行目―二行目。「遂造人中紵像一軀。相好端嚴希世所有、置略前廳須彌寶座。永安二年中、此像每夜行遶其座、四向脚跡隱地成文、於是士庶異之咸來觀瞻、由是發心者亦復無量、永熙三年秋、忽然自去莫知所之。」)。この像は永安二(五二九)年から永熙三(五三四)年に至るまで存在していた。

例25 『金石萃篇』卷三十三 道胎造記像

北齊天保一〇(五五九)年七月一日銘の比丘道胎の造像による盧舍那法界人中像(前掲論文「盧舍那法界人中像の研究」下段、九行目一三行目。「記横廣七寸五分、高五寸三分、八行行 四字五字六字不等正書、今歸偃師武氏」大齊天保十季七月十五日比丘道胎敬造「盧舍那法界人中像一軀」願盡虛空邊法界一切衆生成等正覺」。

尚、吉村怜「盧舍那法界人中像の研究」では、齊天保十季銘のこの盧舍那法界人中像は、既に逸亡しており、像跡のみ存在していたことが、『金石萃篇』卷三十三 道胎造記像の注より明らかにされ、像高は像跡の寸法横廣七寸五分、高五寸三分から、一尺前後と推定している。像高は約一尺と推定される。所在不明。

例26 『陶齋藏石記』卷十三 □市生造象記

北齊武平六(五七五)年五月一日銘の□市生造像による人中盧舍那像。(前掲論文「盧舍那法界人中像の研究」下段、二二行目一二七頁、上段、二行目。『陶齋藏石記』卷十三 □市生造象記「石高三寸、廣五寸八分 二十行行五字有側正書 大齊武平六年歲次乙未年五月甲寅朔十五日□佛弟子□市生造人中盧舍那像一軀」上為 帝王師僧父母亡過現在普及一切衆生咸同思。所在不明。

例27 『北齊武平七(五七六)年銘盧舍那造像記』

體軀中に法界を網羅し、六道を包含する、北齊武平七(五七六)年銘の盧舍那白玉像(前掲論文「盧舍那法界人中像の研究」二一九頁、下段、六行目一八行目)「敬造盧舍那白玉像一軀、并有二菩薩……………」。

②現存する毘盧遮那仏

中国古代に像顕され現存する毘盧遮那仏の代表としてはまず、七世紀の作である龍門石窟奉先寺洞の本尊毘盧遮那仏が挙げられるが、すでに五世紀以前よりコータン地方で、華嚴教主毘盧遮那法界人中像の造像が

始められたと思われる遺品が現存する。漸次クチャ地方や燉煌などでも造像されたよう多数現存している。西域地方の毘盧遮那法界人中像については、既に大村西崖の『支那美術史彫塑篇』また、松本榮一氏が一九三六年に「西域華嚴美術の東漸」(上)、『國華』第四拾六編第七冊 國華社一九三六年)、「西域華嚴美術の東漸(中)」(『國華』第四拾六編第八冊 國華社一九三六年)、「西域華嚴美術の東漸(下)」(『國華』第四拾六編第十冊 國華社一九三六年)及び、『燉煌畫の研究 附圖』・『燉煌畫の研究 圖像篇』(東方文化學院東京研究所 一九三七年(復刻初版発行 同朋社出版 一九八六年))で言及されその研究の基礎が見られる。さらにそれを踏まえて、一九五〇年に水野清一氏が「いわゆる華嚴教主盧遮那仏の立像について」(『中国の佛教美術』平凡社 一九九〇(『東方学報』京都 第一八冊 一九五〇年刊)。に於てまた、一九五九年には前述の如く吉村怜氏が「盧舍那法界人中像の研究」に於て、さらに一九八〇年には伊藤史朗氏が「盧舍那仏立像」(『学叢』第二号 京都国立博物館 一九八〇年)。に於て論究され、研究が重ねられ詳しく考察されているので、その記述を参考に毘盧遮那人中像の遺品を西方より東に追って行くと次のごとくである。

東トルキスタン南道のコータン地方では次の六例の人中像が挙げられる。

例28 ハーディング収集、ドモコ発見立像(図4)。

例29 ハーディング収集、ドモコ発見坐像(図5)。

例30 スタイン収集、ファルハード・ベーク・ヤイラキ発見立像(図6)。

例31 スタイン収集、ダンダーン・ウィリク発見立像(図7)。

例32 バルディーン・カーン収集、コータン地方発見坐像(図8)。

例33 アンドリュウス収集、コータン出土壁画の上半身像(図9)。

次に東トルキスタン北道一帯より燉煌地方では次の七例の人中像が挙げられる。

例 34 クチャ地方キジール千仏洞 第一六剣士洞付近の一窟の壁画中の立像(図10)。

例 35 ル・コック氏の挙げる、クチャ地方キジール出土木彫断片(図11)。

例 36 グリウンウェーデル氏の挙げる、カラシャール地方シオルチュック第九洞壁画中の立像(図12)。

例 37 燉煌千仏洞 第一三五(四二八)窟左壁の立像(図13)。

例 38 大英博物館蔵、絹本着色『報恩経变相』中の毘盧遮那仏坐像(図14)。

例 39 燉煌千仏洞第一四(二五二)窟左側龕『報恩経变相』中の毘盧遮那仏坐像(図15)。

例 40 燉煌千仏洞 第一三五C(三二一)窟右壁の坐像(図16)。

また他に次のような例が見られる。

例 41 拓本では高寒寺石仏法界像(図17)。

例 42 フリーア美術館蔵 隋代 如来立像(図18)。

例 43 ギメ博物館蔵 銅造 鍍金 像高一四、二cmの盧舍那仏立像(図19)。

例 44 石窟では雲岡曇曜五窟の中央窟、第十八洞の本尊立像(図20)。

次には現存する代表作例である、龍門石窟奉先寺洞の本尊盧遮那仏坐像を挙げなくてはならないが、龍門石窟に盧舍那仏はもう一体あったと

考えられる。

例 45 龍門石窟奉先寺洞 本尊盧遮那仏坐像(図21)。唐の高宗の発願により造像。脇侍は本尊左右に各々、羅漢、菩薩、天王、力士像の九尊形式。他に、供養者、等身僧形像等数体。奉先寺洞の毘盧遮那仏については、本文で論ずる。

例 46 龍門石窟蓮華洞門外南側 楊氏造盧舍那仏龕 本尊坐像。龍朔二(六六二)年完成。脇侍は左右に各々羅漢、菩薩、天王、力士像の九尊形式。他に供養者等。

それらを松本榮一氏、水野清一氏、吉村怜氏、伊藤史朗氏の見解を基に、ほぼ制作年代順に整理すると、次の如くである。

ハーディング収集ドモコ発見立像	五世紀以前か
ハーディング収集ドモコ発見坐像	五世紀以前か
スタイン収集ファルハード・ベーク・ヤイラキ発見立像	五世紀以前か
スタイン収集タンダーン・ウィリク発見立像	五世紀以前か
バドルティーン・カーン収集コータン地方発見坐像	五世紀以前か
アンドリュウス収集コータン出土壁画の上半身像	五世紀以前か
キジール千仏洞第一六窟付近壁画中の立像	六世紀頃
ル・コック氏収集キジール出土木彫断片	六世紀頃
グリウンウェーデル収集シオルチュック第九洞壁画中の立像	八世紀以後か
僧詮造像の人中像	東晉末(五世紀初)
雲岡第十八洞本尊	北魏(四六〇―)
道弘造像の人中像十軀	北魏(六世紀初)
孟仲暉造像の人中像	北魏(一五二九)
燉煌第一三五(四二八)窟立像	北魏
道祖造像の盧舍那法界人中像	北齊(五五八)
□市生造像の人中盧舍那像	北齊(五七五)
武平七年銘の盧舍那像	北齊(五七六)
高寒寺法界像	北齊

燉煌第二三五C(三)窟坐像。

大英博物館蔵『報恩經变相』中の毘盧遮那仏坐像

燉煌第一四(二五)窟『報恩經变相』中の毘盧遮那仏坐像

ギメ博物館蔵 盧舍那仏立像

フリーア美術館蔵 如來立像

龍門石窟蓮華洞 門外南側 楊氏造盧遮那仏龕本尊坐像。

龍門石窟奉先寺洞 本尊毘盧遮那仏坐像

唐末

唐末

五代

唐代

隋代

龍朔二(六六二)

唐上元二(六七五)

(3) 東大寺大仏創建後四〇〇年足らずの、保延六(一一四〇)年に著された『七

大寺巡禮私記』では、この像を毘盧舍那、釈迦大日のいずれとすべきか判明し兼ねている(『校刊美術史料』寺院編上巻 『佛井等丈尺寸法印相事』三

三頁 七行目一〇行目)。

また辻善之助『日本佛教史之研究』(金港堂書籍 一九二五年三月)では

『東大寺要録』から次の記述を引いている。『…而日輪者大日如來成、本地

者盧舍那佛成、…』(五一頁 八行目—九行目)。

(4) 統一新羅後に於る、毘盧遮那仏については、朴亨國氏の論文『七獅子蓮華

座の図像について—韓国統一新羅後期の石造毘盧遮那仏坐像を中心に—

(『密教図像』第一四号 密教図像学会 一九九五年)で、またその請来につ

いては『日本における七獅子蓮華座の受容と変容』(『佛教藝術』二二八号

毎日新聞社 一九九六年)に近頃詳しく述べられているが、この毘盧遮那仏

は七獅子座に坐す、いわゆる密教金剛界系大日如來の像ということで、いわ

ゆる西域の華嚴教主の毘盧遮那仏とは異なり、その影響は受けていないこ

とがあらからである。七獅子座に坐す毘盧遮那仏を説く經典は善無畏系で、

我国での文獻上の初見は、淳祐(八九〇—九五三年)の『要尊道場觀』と見ら

れる。従って、この像は本研究の対象から外すこととするが、善無畏(六三

七—七三五年)を待たないまでも、仏駄跋陀羅(三五九—四二九年)の『六十

華嚴』(四一八—四二〇訳出)などでは毘盧遮那仏の台座を獅子座としてい

る。これは七獅子と関連した台座であろうか、あるいはいわゆる玉座の事で

あろうか。この点を焦点に以後考究を重ねる必要はあろう。

(5) 注(2)参照。

(6) 松本榮一『西域華嚴經美術の東漸(上)』(『國華』第四拾六編第七冊 國

華社 一九三六年)、『西域華嚴經美術の東漸(中)』(『國華』第四拾六編第

八冊 國華社 一九三六年)、『西域華嚴經美術の東漸(下)』(『國華』第四

拾六編第十冊 國華社 一九三六年)及び、松本榮一『燉煌畫の研究 附

圖・燉煌畫の研究 圖像篇』一九三七年、東方文化學院東京研究所(復

刻初版発行 一九八六年 同朋社出版)。

(7) 水野清一『いわゆる華嚴教主盧遮那仏の立像について』(『中国の佛教美

術』一九九〇年、平凡社(『東方學報』京都第一八冊 一九五〇年刊))。

(8) 吉村伶『盧舍那法界人中像の研究』(『美術研究』第二百三號 吉川弘文館、

一九七五年一月)。

(9) 伊藤史郎『盧舍那仏立像』(『學叢』第二号 京都国立博物館 一九八〇

年)。

(10) 大村西崖『支那美術史 彫塑篇』三五五頁。

(11) 水野清一・長廣敏雄『河南洛陽 龍門石窟の研究』座右宝刊行会 一九四

一年九月(復刻版 同朋舎 一九八〇年一月)。

龍門文物保管所 北京大学考古系編『中国石窟 龍門石窟』平凡社 一九

八八年八月。

劉景龍著・龍門石窟研究所編『奉先寺』文物出版社 一九九五年四月。

(12) 前掲書『河南洛陽 龍門石窟の研究』『龍門石窟録』録文八〇六(二三四頁、

上段一〇行目—下段一〇行目)。

八〇六、唐高宗奉先寺大盧舍那像龕記并開元牒 左行 奉先寺

開元十二年十二月十二日 西曆七三二

河洛上都龍門山之陽 大盧舍那像龕記。大唐高宗天皇大帝之所

建也。佛身通光座高八十五尺。二菩薩七十尺。迦葉阿難金剛神王。

各高五十尺。粵以咸亨三年壬申之歲四月一日。皇后武氏。助脂粉錢

二萬貫。奉 勅檢校僧西京實際寺善道禪師法海寺主惠陳法師。大

- 使司農寺卿韋機。副使東面監上柱國樊元則。支料匠李君瓚。成仁威。姚師積等。至上元二年乙亥十二月卅日畢功。調露元年己卯八月十五日。奉 勅於大像南。置大奉先寺。簡召高僧行解兼備者二十七人。闕即續填。創基住持軌法英律。而爲上首。至二年正月十五日。大帝書額。前後別度僧一十六人。並戒行精勤。住持爲務。恐年代綿邈。芳紀莫傳。勒之頌銘。庶貽永劫云爾。佛非有上。法界爲身。垂形化物。俯迹同人。有感即現。無罪乃親。愚迷永隔唯憑信因。寔賴我 皇。圖茲麗質。相好希有。鴻顏無匹。大慈大悲。如月如日。瞻容垢盡。祈誠願畢。正教東流。七百餘載。大龜功德。唯此爲最。縱廣今十有二丈矣。上下今百冊尺耳。牒。勅旨龍花寺宜合作奉先寺。開元十年十二月五日。河南縣 牒奉先寺。牒。被符奉 勅旨如右。請錄白入司施行。牒舉者牒寺准狀者。今以狀牒。牒至准狀。故牒。開元十年十二月十二日。史樊宗牒。尉員狎。顯昌舞水沈隱道鐫。政和六年四一日到此上石。進士都仲容記。
- (13) 前掲書『中国石窟 龍門石窟』
- (14) 注(12)参照。
- (15) 前掲書『中国石窟 龍門石窟』二五一頁—二五二頁。
- (16) 前掲書『奉先寺』二二頁。
- (17) 前掲書『河南洛陽 龍門石窟の研究』七六頁。
- (18) 前掲書『中国石窟 龍門石窟』二二九頁—二三三頁。  
前掲書『奉先寺』一八頁。
- (19) 前掲書『奉先寺』
- (20) 塚本善隆『大石仏』引文堂 一九五三年八月。  
松原三郎『大仏の道—唐代の大仏—』(『古美術』二二号)三彩社 一九六八年三月。
- 桑山正進「バーミヤン大佛成立にかかわるふたつの道」(『東方学報』第57冊)京都大学人文科学研究所 一九八五年。
- (21) 前掲論文「バーミヤン大佛成立にかかわるふたつの道」
- (22) 『大正蔵』一五 No.六四三 六四五頁、
- (23) 『大正蔵』一四 No.四五七 四三四頁 下段一六行目。
- (24) 同右 No.四五六 四三〇頁 上段二八行目—中段一二行目。
- (25) 同右 No.四五四 四二三頁 中段一行目—一七行目。
- (26) 麗賓国を、カンダーラと判断し、本拙論では用いる。
- (27) 『大正蔵』三 No.一九〇 六五六頁 中段八行目—一五行目。
- (28) 例を挙げれば賓陽南洞化壁中央「隋の河南郡興泰果人梁佩 仁造 釈迦像龕」二龕、奥寄り「唐の河南果思順坊老幼等造 弥勒像龕」。南壁奥寄り「方形帷幕大龕」。正壁「大五尊像」。唐貞觀二三年龕」。藥方洞東壁「永照三年孫姬龕」。「普泰二年路僧妙龕」。「武平六年都邑師道興龕」等々枚挙に暇ない。
- (29) たとえば、『彌勒菩薩所問本願經』(『大正蔵』二二 No.三四九 一八六頁、下段一四行目)の、迦葉は弥勒を持って、釈尊からの金糸の袈裟を渡すなど。
- (30) 前掲書『河南洛陽 龍門石窟の研究』七三頁、注一七参照。
- (31) 同右書では『唐書』卷八五を挙げている。
- (32) 前掲書『奉先寺』では『金石萃編』第五八卷 咸亨元(六七〇)年「李義豊造像記」等を挙げている。





- (42) 梶山雄一「神変」(『佛教大学総合研究所紀要』第二号)一九九五年三月。
- (43) 『大正藏』九ノ二七八 四一〇頁 下段三行目―二二行目。
- (44) 同右、四一四頁 上段二〇行目―中段五行目。
- (45) 同右、四〇九頁 下段二五行目―四一〇頁 上段二八行目。
- (46) 同右、三九九頁 中段二九行目―下段一行目。
- (47) 同右、四〇一頁 中段二八行目―二九行目。
- (48) 同右、四〇三頁 中段二四行目―二五行目。
- (49) 同右、四〇八頁 上段二〇行目―二三行目。
- (50) 同右、下段二〇行目―二四行目。
- (51) 同右、四一一頁 中段二三行目―二六行目。
- (52) 同右、四一九頁 上段一〇行目―一五行目。
- (53) 秋山光和「敦煌壁画研究の新資料―James Lo氏撮影写真とフェック、エ  
ルミタージュ両美術館所蔵断片の検討」(『佛教藝術』一〇〇号)毎日新聞社  
一九七五年。

—— Vairocana in Mahāyāna ——

Yukiyo Tashiro



図3 毘盧遮那仏坐像 木造  
福岡 観世音寺戒壇院



図2 毘盧遮那仏坐像 脱活乾漆箔造  
奈良 唐招提寺金堂

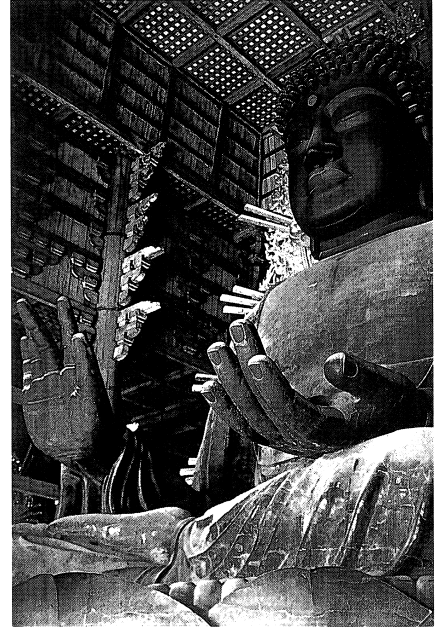


図1 盧遮那仏坐像 金銅渡金造  
奈良 東大寺金堂



図5 法界毘盧遮那人中像及如来並坐像  
ハーディング収集 ドモコ出土



図4 法界毘盧遮那人中立像  
ハーディング収集  
ドモコ出土



図8 法界毘盧遮那人中画像  
バドルディーン・カーン  
収集 コータン地方出土

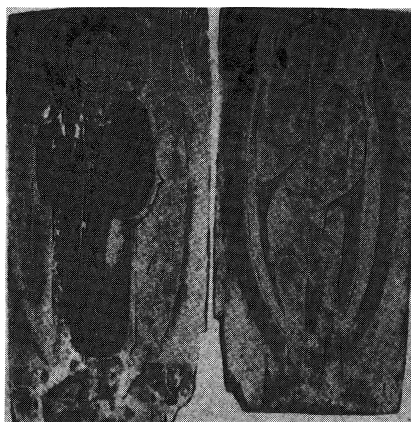


図7 法界毘盧遮那人中像及如来並立像  
スタイン収集 ダンダーン・ウィ  
リク出土

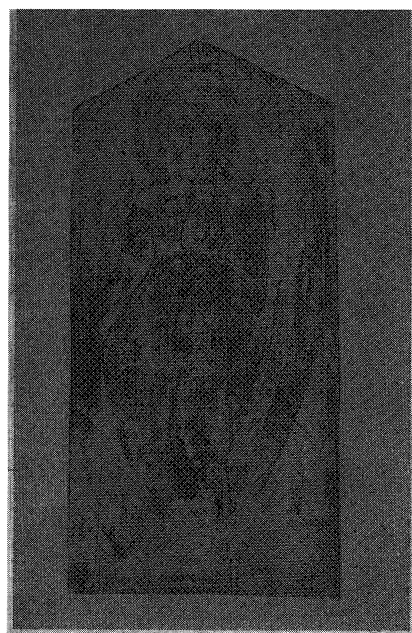


図6 法界毘盧遮那人中立像  
スタイン収集 ファルハード・ベ  
ーグ・ヤイラキ出土



図11 ル・コック氏の  
挙げるクチャ地  
方キジール出土  
木彫断片



図10 人中如来立像  
クチャ地方 キジール千仏洞  
第一六剣土洞付近壁画



図9 法界毘盧遮那人中上半身像  
アンドリュウス収集 コータン出  
土壁画



図14 『報恩経变相』中の毘盧遮那仏坐像  
絹本着色 大英博物館蔵

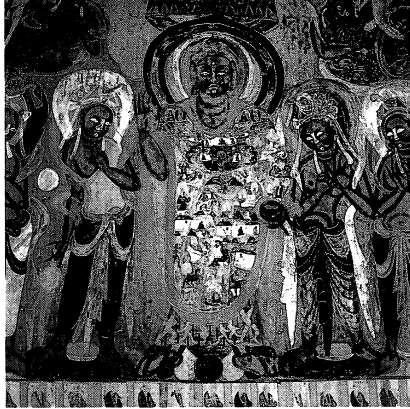


図13 法界毘盧遮那人中立像  
燉煌千仏洞 第一三五（四二八）  
窟左壁の立像



図12 法界毘盧遮那人中立像  
グリユンウェーデル氏の挙げるラ  
シャール地方 ショルチュック第  
九洞壁画

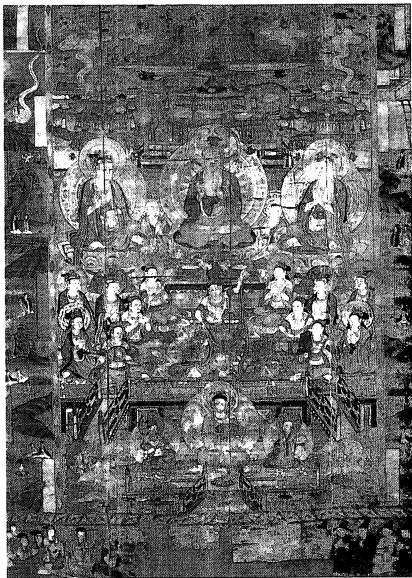


図16 『報恩経变相』  
絹本着色 大英博物館蔵

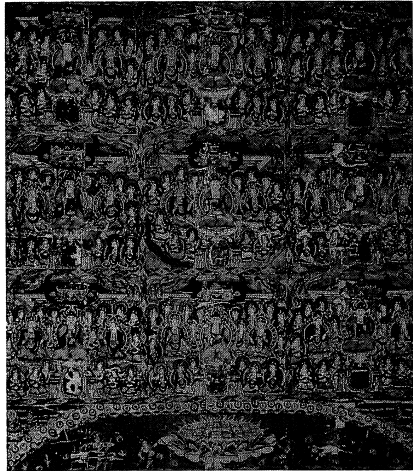


図15 『華嚴経变相 七所八会』  
絹本着色 ギメ美術館蔵





図19 法界毘 遮那人中立像 銅造鍍金  
ギメ美術館蔵



図18 人中如来立像  
フリーア美術館蔵

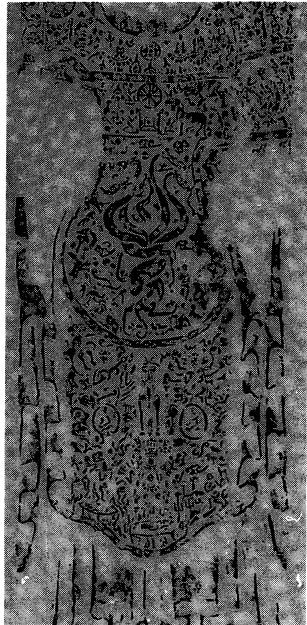


図17 法界人中立像  
高寒寺石仏拓本

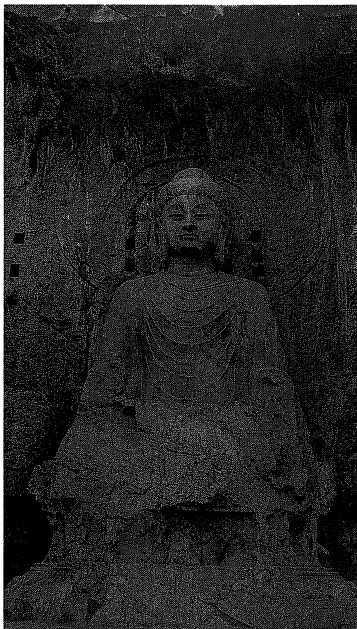


図21 毘盧遮那仏坐像  
龍門石窟奉先寺洞

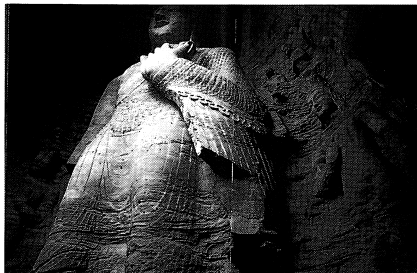


図20 雲岡曇曜五窟 第十八洞本尊立像

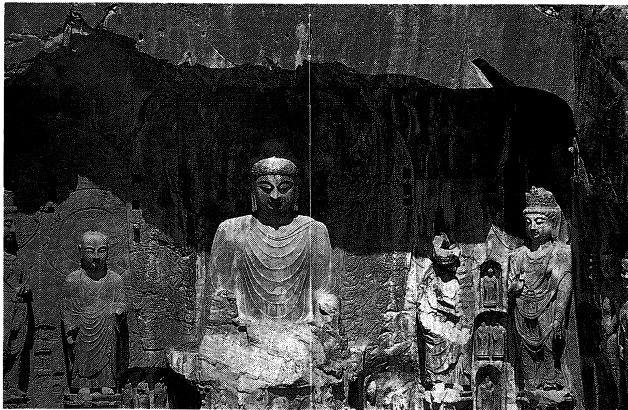


図22 奉先寺洞仏龕正壁